

高き彼物

作・マキノノゾミ

登場人物（登場順）

徳永光太郎（四十二）

野村市恵（四十）

猪原智子（三十二）

藤井秀一（十八）

猪原平八（八十三）

猪原正義（五十五）

片山仁志（三十三）

●時

第一幕 昭和五十三（一九七八）年、七月後半のある日、午後二時頃。

第二幕 その一週間後、午後四時半を少し回った頃。

●場所

静岡県川根町で食料雑貨店を営んでいる猪原家の居間。

第一幕

昭和五十三年、七月の終わり。午後二時近く。
静岡県川根町。猪原家の居間。

居間の上手のガラス戸の向こうは三和土たたまきになっていて、そこは食料雑貨「猪原商店」の店舗になっている。店内の様子はわずかに窺うかがえる程度、すなわち品揃しなぞろえなどもほんの一部見えるだけでよい。居間の奥の廊下からそれぞれの家族の部屋や台所、風呂場、便所へとつながっている様子。廊下の向こう側はガラス戸越しの小さな庭。——といっても申し訳程度の大きさで、すぐに二メートルほどの高さの石垣になっており、その上は茶畑になっている。

つまり、山沿いの街道に面した小さな土地に建てられた、あまり新しくも美しくもない家である。

——幕が上がると、誰もいない居間で電話が鳴っている。激しい雨の音。外は夕立らしい。

部屋の中央には卓袱台ちゃぶだい。部屋の隅には仏壇。別の隅には電話と小さな手提げ金庫、卓上ラジオ、メモ用紙などが載った文机ふつくえ。トイレットペーパーやラーメンなどの商品が入った（あるいは入っていた）段ボール箱が幾つか。卓袱台の上には麦茶のビンと飲みかけのコップが二つ。

店から居間への上がり框かまちの下で手拭てぬぐいを使っていた警官の徳

永光太郎(四十二)が鳴り出した電話をどうしたものかとお口オロしている。徳永はこの雨の中を自転車であつて来たせいで全身ずぶ濡れである。彼は仕方なく奥に向かつて大声を
はり上げる。

徳永 智ちゃん、電話鳴ってるにーッ。(自分が上がって行って受話器を取ろうかと一瞬迷うが)オラずぶ濡れだもんだでさア。出てやれんですよ。……ほーい。

廊下の奥の、おそらくは台所とおぼしき辺りから、この家の長女である猪原智子(三十一)の声が聞こえてくる。

智子 (オフで)いいですッ、放つといてエーッ。

とは言われたものの、鳴り止まない電話がどうにも気になる彼は、三和土のほうから身を乗り出して何とか受話器を取れないものかとトライして——当然のように——失敗する。すなわち、ずぶ濡れの身体で居間の床にべったりと倒れてしまふ。その場に電話のコール音が止む。

徳永 (二重の敗北に思わず声を発して)ああ……ああ。

電話が鳴り止むと、奥の台所から野村市恵(四十)と智子のいささか緊迫した感じの会話が聞こえる。

市恵 (オフで)智子ちゃん雑巾は? この流しの横にしぼつてある奴でいいの?

智子 (オフで)うん、それ使つてエ、すみません。
市恵 (オフで)ううん、いいだよ。

市恵が近づいてくる気配にあわてて徳水が三和土に戻ると、

市恵が廊下から足早に現れる。彼女はいかにも中学校の国語教師といった雰囲気を持つている女性。分相応に華美にはならないようにと細心の注意を払った精一杯のお洒落しゃれをしている。

市恵 （廊下や床を見て）ああああ、もうこの辺ずっとビショビショだに。

彼女は濡れている場所をあちこち雑巾で拭き始める。これは徳永のせいではなく、つい今し方ずぶ濡れの少年がここを通って行ったためである。

徳永 自転車だったでねえ。ハアこれじゃ濡れるだけ濡れるしかないでねえ。

市恵 嘘うそみたいですねえ、ついさっきまであんなにカンカン照りだっただに。

徳永 なア、まるで絵に描いたような夕立だら。往生こいちゃったでオラア。

市恵 何あれ？（と奥の部屋をアゴで示して）どうしちゃったんですか？

徳永 （手拭いを使いながら）いや、通報があったでえ。前山橋の先の山ん中でさア、炎天下でずっとアスファルトの上に座り込んでる高校生みたいなのがいるでつつつて。ちっと様子もおかしいで、ありゃア見に行つてやったほうがいいじゃないだかいねえって言うもんだでさ。ほんで慌てて行つてみたら、あの子がハアこんななつて（ガックリ首を落とす）座つてるでエ。どうしたでえつつつたら、大丈夫ですなんて言うだけエがさ、見りゃアハア本人は日射病でフラフラんなつてるでエの。そんで聞きゃア猪原さんとこで世話になつとるちゆうもんだでさ、とりあえず自転車に乗つけて来たはいいんだけど、途中でいいきなりこんなに降り出いちゃつたら。ハア

しよんないじゃん、二人してずぶ濡れでエの。

市恵 誰かしら。猪原先生の親戚の子かしら。

徳永 さア。

市恵 昨日から学校は夏休みだで。

徳永 あアそんならそうだかもわからんねえ。

市恵はうなずいて雑巾がけを再開する。

智子がバスタオルを抱えて足早に現れる。

智子 野村先生、ごめんなさいね。

市恵 いいよオ。どう？

智子 うん、今とりあえず着替えさせて奥の部屋に寝かせた。

徳永 まア大丈夫だと思っただけだね、ちよつと休ませりゃ。

智子 (徳永に) どうも本当にお手数かけて。

徳永 水分だけは摂とらせてやらにゃいかんに。

智子 そう思って、今これ。(と卓袱台の上から取り上げた麦茶のビンを示す)

市恵 (行きかける智子に) ねえ智子ちゃん、誰？

徳永 親戚の子かね？

智子 ううん。ほら今年の春休み、東京からオートバイで来てて事故やった。

市恵 事故？

徳永 (ようやく思い出したように) あアあアあん時の、あの二人組の高校生の。

智子 (うなずいて) 昨日突然来て。友だちの子が亡くなった場所に花を供えたいからって。(行きかけて) あ、何やってるだかいやア私。はい徳永さん、これ使って。(と忘れていたバスタオルを渡す)

徳永 あアすまんねえ。

智子 いいえ、こつちこそお世話かけて。(市恵に) 本当にごめんなさいね。もう簡単に拭いてくれればいいでねエ。

市恵 うん、もう終わりだで。

智子は奥へ戻って行く。

市恵 何ですか？ 事故って。

徳永 (バスタオルを使いながら) あアあのね、春休みの終わり頃だったかいね、東京から二人乗りでバイクに乗って来てた高校生が事故やってね、一人は即死だっただよ、たしか運転しとったほうがなあ。

市恵 まあ。

徳永 (やや吐き捨てる調子で) 東京の高校生がこの辺の道なら誰も来やせんと思つて、いい気になってスピード出しすぎただよ。カーブン曲がりきれんでね、ガードレールに激突したでえ。

市恵 いやア。(と眉まゆをひそめて) そんなじゃ今のがそのとき後ろに乗つてたつた子？

徳永 (うなずいて) どうりでどつかで見たことある子だなアと思つたでエ。……ああ、そんだであんなとこにじーっと座つとつただなあ。ちょうどあそこが事故現場だったでねえ。

市恵 へえー。

徳永 それを猪原先生が助けたじゃん。たまたまそこに通りかかったもんだでね、救急車呼んだり何だりしてやつて。

市恵 そうだったんですか。あアあ、そんでねえエ。

徳永 (うなずいて) 普通ならあんなとこで事故やつとつたつてだアレも気づきやせんでね。先生もよう通りかかつてくれたこんだつて言つたこんじゃん。

市恵 本当ですなエ。

徳永 ねエ。

市恵は作業を終えて雑巾を流しに戻しに行き、再び居間に戻る。

市恵 ……でも。

徳永 うん？

市恵 (真剣な顔で) そんな炎天下でじーつとしてたつていな
ら、まだ彼の心の傷は癒えてないだねエ、きつと。

徳永 まアそういうこんだらなア。ああいうのはつらいだら、
生き残りちゃったほうもそれなりに。

市恵 そうだらねえエ。

徳永 ところで。

市恵 はい？

徳永 お宅は？ どちらだったいね。

市恵 あ、申し遅れまして。私は野村市恵と申します。むかし
猪原先生と同じ学校で国語を教えてた縁で、いまでもこうし
ておつき合いを。

徳永 あ、そうかね。へえ。いや実はこう見えてもオラも先生
の教え子だでね。

市恵 あら。

徳永 まア不肖の教え子だんさ。今からハア二十五年くらい前
でエ。へへへ、だでまア旧ふるいつき合いでえの、ここの先生と
も。

市恵 そうですね。私は先生が学校お辞めになるちようどその
年に教師になったもんですから、もうかれこれ十五年。

徳永 あ、そうかね。で、お宅のほうは今でもやってるだけ？

市恵 ええ、いまは袋井のほうで中学校の教師を。

徳永 ハア島田じゃないだね。

市恵 結婚してた頃いっぺん辞めてたもんですから。今は実家
に近いところで。

徳永 あら何でえ、離婚しちゃったの？

市恵 ……。

徳永 あ、いかんやアつい尋問しちゃうで、職業病だの。(と
笑う)

市恵 (苦笑して) まあ若気の至りで、ほんの二年くらいで。

徳永 子どもは？

市恵 十歳になる息子が一人。

徳永 はアーそら大変だやア。オラんとこも五年前に嫁さん子ども連れて逃げちゃったでね。

市恵 あらア。

徳永 へへへ、まあこつちは若気の至りなんてもんじゃないだんさ。ハア氣イ強いでねエ、こころん川根の女ん衆は。……ところで先生はいんだけ？

市恵 島田の病院のほうへ行つてらっしゃるとかで。

徳永 病院？ 何でエ、先生もいよいよどつか悪くしただけ？

市恵 そうじゃなくて、健康診断の結果を聞きにですって。ほら、先生はいま定期検診とかおやりにならないから、それで智子ちゃんが先生のお尻しりた叩いて無理矢理行かせてるんですって。

徳永 あアそうかね。まあ先生もハアいい歳だでねえ、智ちゃんもいろいろ心配するだら。

市恵 (少々ムツとして) 先生はまだまだお若いですよ。

智子がコップを持って出て来る。

智子 ごめんなさいね徳永さん、はい麦茶。

徳永 あアありがとね。

智子 徳永さんも着替える？ お父さんの甚平ならあるけど。

徳永 ハハハ、勤務中だでね、そういうわけにやいかんでエ。

市恵 (智子に) あの子、どう？

智子 うーん、本人は大丈夫だつて言うだけだね、いちおうお父さん帰つて来るまで寝ときなさいって無理矢理寝かしちゃった。

市恵 そう。いま聞いたのよ、事故のこと。いろいろ大変だっただねエ。

智子 そうなの。春休みにねエ……（気づいて）あ、そうだ徳永さん、こちら野村市恵先生。

徳永 ああ、いま聞いたで。猪原先生と同じ学校にいたただって？

智子 そうなの。ハア野村先生くらいじゃないかしら。学校関係の人でいまでもおつき合いあるのって。

市恵（生真面目に）私の方がいつも無理矢理押しかけてるんです。猪原先生はいまでも私のもっとも尊敬する教育者ですから。

智子 そんなふうには言っていたでいて。（と笑いながら頭を下げる）

市恵（あくまで生真面目に）あら本当だに、智子ちゃん。

智子 はいはい。

徳永 そんならいつそ先生の後ぞえになっちゃやいいじゃん。

（智子に）ねエ？

智子 ええ？（と笑う）

市恵（動揺して）何ていうことを、あなたは。

徳永（笑って）いいら、智ちゃん。

智子 フフフ、でもうちのお父さんもう五十五だに。いくら何でも可哀想^{かわいそう}だやア、野村先生が。

市恵（生真面目に）いや私はそんな、歳のことなんてアレだけ

ど。（徳永に）猪原先生に失礼でしょう、そんなこと言うのは。（智子に）ねえエ。

智子 フフフ、徳永さんのそういう冗談は通じやせんでね。野村先生はちゃんとした真面目エな人だで。

徳永 やいやい、ハハハ。

市恵（強引に話題を変えて）でもさっきのあの子だけど。

智子 え？

市恵 昨日来たってことは、昨夜はこの家に？

智子（うなずいて）あれから、事故のあとね、何度かお父さんあの子に葉書出してたらしいの。まア大丈夫かとか、元気出

しなさいとか、そんな程度の葉書だと思っただけだね。

市恵 (感心して) いかにも先生らしいやア。

智子 (苦笑して) そんな大げさなもんじゃないんだけど、あの子からも一度長い手紙が来たりしてね。

市恵 へえ。

智子 そんなこともあつて、まあうちには来やすかったと思うんだけど。何かね、長野で明日から予備校の夏期合宿だかがあつて、それに行くついでにこっちへ寄つただつていうだけだね。

市恵 合宿つて受験のための？

智子 そう。それで本当はね、昨日ここに挨拶あいさつに寄つて、その

後ちよつとあの事故のあつた場所へ行つてね、お花とお線香供えて、それですぐ帰るつて言つてただけど、どうもねエ……。

徳永 何でエ。

市恵 どうしちゃつたの？

智子 うん……何かどうしてもね、あそこ行つたら動けなかつただつて。

徳永 あの、現場からかね。

智子 (うなずいて) ずっと日が暮れるまで座つてて……お父さんが心配して見に行つたら、それでもまだじーっと座つてて……。

徳永 ふーん……。

智子 それだでね、うちに泊めたの。

市恵 そう……。

徳永 そうかね。昨日もおつただかね、あそこに。

智子 (うなずいて) ……また、今日も動けなかつただね、きつと。

三人、少し黙り込んでしまう間。

雨音にまじつて遠くで汽車の汽笛が鳴る。

智子 (徳永に) やっぱり気持ち悪いでしょ、濡れたままじゃ。
徳永 うん、交番戻りゃ着替えはあるで。

智子 じゃア傘持ってく？

徳永 いいよいいよ、ハア空も明るくなってきたで。もうちょつと待つてりゃ、じき止むら。

市恵 本当にさつきはアツていう間にザアーつときたでねえ。

智子 ねえエ。……あ、やだやア、二階の洗濯物入れるの忘れてた。(と立つ)

徳永 (笑つて) ハア遅いら、いくら何でも。

智子 (行きながら) いちおう軒の下に干してたでちよつと見てくる。ごめんなさい何度も何度も。

智子は奥へ去る。

徳永 (見送つて) フフ、智ちゃん、近ごろはずつと店にいるみたいだけど、ハア静岡の製薬会社は辞めちやつただかいねえ。

市恵 あア辞めたんですつてよ、先々月いっぱい。

徳永 あ、そうかね。ふーん。……となるといいよ結婚だからねえ。

市恵 私もさつきそう聞いたけど、本人は違うよオつて。

徳永 ハハハ、そりゃ本人は言わすかいかや、恥ずかしがつて。

市恵 ……。

徳永 でも……あアそう、違うつて言つてたかね、本人は。

市恵 ええ。

徳永 そんなでも智ちゃんだつてハアいい歳だでね。ああ見えたつて来週の日ではア三十一だで。

市恵 (驚いて) ハアそんななる？

徳永 (嬉し^{うれ}そうに) なるだよ、あれで。数えて三十二つたら女もはア前厄だでね。ハアそろそろ売れにゃいかんら。

市恵 (感慨深^{こころ}そうに) はア……早いだねえ、時がたつのは。

徳永 ねエ早いだよオ、あんな。

市恵 ……でも、よくご存じですね、智子ちゃんの誕生日まで。

徳永 え、ああそりゃア……（と少し慌てて）オラ警察官だでねえ、まア住民のみなさんのことはいろいろ知ってにゃいかなでね。

市恵 へえー、すごい。

徳永 こう見えたってオラもはア二十年以上は警官やつとるでね。

市恵 （嬉しそうに）じゃ、猪原先生は何月何日？

徳永 ええ？ （愛想なく）先生のは知らんやア。

市恵 何で？ だってこの世帯主でしょ？

徳永 世帯主でも何でもあんな、オラ別に先生に気があるわけじゃないだで。

市恵 ……ええ？

徳永 うん？

市恵 あなた……いま聞き捨てならないこと言いましたね。

徳永 え？（誤魔化して）あアいい匂いだや、このタオル。

市恵 ……。（眉をひそめて徳永を見る）

徳永 そんな顔せんでもいら。（照れて）まんざらおかしな話でもないで。

市恵 いや、おかしいでしょう、それは。（いくら何でも）

徳永 そうかいやア。

市恵 だって、あなたお幾つ？

徳永 今年で四十二。

市恵 ほら。

徳永 ほらってあんな、（声をひそめて）いや、そりゃ向こうが

二十歳はたちやそこらの小娘だっちゅうなら話は別だんさ、ハア三

十一だで。嫁に行かんで三十一になつてりや、ハアオラでも射程距離だら。

市恵 射程距離って……あなたのお宅には鏡は？

徳永 失礼なこと言っちゃいかなら。いや、そりゃ智ちゃんは

美人だよ。

市恵 (力強く) ええ。

徳永 ほんでオラは男としちやまアそれほどでもないよ。

市恵 (さらに強く) はい。

徳永 だでまアジュリーみたいなわけにやいかんけどもさ。

市恵 ジュリーって……。 (絶句する)

徳永 (さらに声をひそめて) ほんでもオラア公務員で収入だつていちおう安定してるでね。先生だってオラのこととはよく知ってるし。それに、あんたはどう思ってるか知らんけど……先生のあのことだつてオラ別に気にしちやいんでね。

市恵 あのことって？

徳永 ほら、学校辞めた。

市恵 な……。 (徳永を厳しく睨みつける)

徳永 (その視線を気にせず) なア？ 本当はそういうのが智ちゃんには一番いいだかもわからんら？

市恵 (声をひそめて) バカなことを。

徳永 (声をひそめて) いや、そんだけオラは真剣だつていうことだに、これは。

話の途中で智子が戻って来る。

智子 小さい声で何の相談？

徳永 (驚いて) あ、いや何でもないだよ、ハハハ、いや智ちゃんが静岡の会社を辞めたつていうでさ、こりやアいよいよ結婚だかいやアつて話。

智子 (少し慌てたように) あ、やだやア、あれはそんなんじゃないでね。

徳永 (大きく) そうだら？ なアオラも違うと思つたでえ。

市恵 (仏壇の写真を見て) この家はずっと智子ちゃんの女手ひとつだもんねえ。先生もおじいちゃんもハア智子ちゃん手放せんのでしよう。

智子 それも困るだけどねえ。(と苦笑する)

徳永 ハア嫁には行かんとこの家で婿とるしかないら。

智子 うーん。

市恵 そんなお話はないの？ 本当に。

智子 (笑って) ないねえ。

徳永 智ちゃん、オラなら別に気にせんでねえ。

智子 (え?) 何が？

徳永 何がつて、この家にさ、婿に入っても。

智子 (わからず) 何で徳永さんが？

徳永 いや……ま……冗談だでき、こういうのは笑ってもらわ

んと困っちゃうやア。

市恵 (無理に調子を合わせて) フッフ、やアねえエ。

智子 (笑い出して) 可笑^{おか}しい。ねえ徳永さん、お巡りさんでも

そういう冗談言っつていいの？

市恵 ねえエ。

徳永 いやア、ハハハ。

市恵 (庭を見て) あ、ハア雨上がったに。

徳永 あ、本当だやア。やいやい、やっぱりオラン走つとる時

がいちばんひどかっただなア。

智子 そうだねエ、きつと。

徳永 ほんじゃオラ交番戻るで。(と敬礼)

智子 はい、どうもご苦労様でした。

市恵 ご苦労様でした。

徳永が出て行く。

市恵 それじゃアあの子は今日帰るだね？ 明日から長野だつ

ていうじゃア。

智子 うん。お父さんが車で静岡まで送ってくことになつてるの。

市恵 そう。じゃア、私も今日はハア失礼した方がいねえ。

智子 (驚いて) 何で。ゆっくりしてって。

市恵 ううん、失礼するわ、いつものこれだけ置いてくで。

(とハンドバッグから中学生の手作りらしい文集を取り出す)

智子 何か用事あるの？

市恵 そうじゃないけど……。

智子 (微笑^{ほほえ}んで) だったらゆっくりしてってほしいなア。お

父さん、野村先生に会うの、いつもすごく楽しみにしてるで。

市恵 (恐る恐る) ……本当に？

智子 うん。この文集だっていつもバカ熱心に読んでるだに、

バカ楽しそうに。

市恵 (はにかんで) そう言ってもらえると、嬉しいけど。

智子 それ見てるとね……あアやっぱりお父さん教師の仕事が

いちばん好きだったんだなアってつくづく思うに。

市恵 (うなずいて) やっぱり学校お辞めになつてからは、少し

お元気がね……。

智子 (笑つて) ハア、ガクーンツつてこうだに。

市恵 ……うん。

智子 そんだでね、秀一^{しゅいち}くんのことにも、ちよつと熱が入る

のかなつて。

市恵 (誰?)

智子 あ、秀一くんっていうのがバイクのあの子。

市恵 ああ。

智子 藤井秀一くんっていうの。あのくらいの歳の子とつき合

うなんて学校辞めて以来でしょ？ だからハアちよつとね。

市恵 熱が入ってるの？

智子 (苦笑してうなずき) 何かそんな感じ。

市恵 へえ。……でもあの子、きつとできる子なんだらね。予

備校の合宿に参加するだなんていうじゃア。

智子 (うなずいて) お父さんが何か東京の有名な進学校の教頭

先生らしいでね。

市恵 (感心して) あアそうなのオ。

智子 (笑って) うちとは大違いだら。
市恵 そんなこと。

店の外から徳永の叫ぶ声がする。

徳永 (オフで) ほーい、ちょっと出て来てみな。

智子 あれ? 戻って来て何だいやア。

徳永 (オフで) 山の上にバカおっきい虹が出てるでエ。

智子 (市恵と顔を見合わせて) 虹?

市恵 へえ、珍しいわね。

智子 行こ行こ。

二人は店の外へいそいそと出て行く。

雨が上がって、外にはすでに強い夏の日差しが戻ってきている。再びうるさいくらいに鳴き始めたミンミンぜみの音が聞こえる。

間。

奥の部屋からジャージ姿の藤井秀一(十八)が現れて、そのまま居間の真ん中あたりでぼんやりと立つ。外見上はぼんやりとしているが、その神経はあきららかにピリピリと張りつめている。庭から雨合羽姿の猪原平八(八十三)がやって来て、廊下のガラス戸を無遠慮に開ける。秀一はその音にびっくりするが、彼に黙礼する。

平八は秀一をじつと見る。

平八 あんた誰でエ。

秀一 (少しどぎまぎして) あ、あの僕です。

平八 ……。(理解しない)

秀一 あの……藤井秀一です、昨夜からお世話になっている。

平八 ……。(それでも理解しない)

秀一 (聞こえぬのかも知れぬと思い大きな声を出す) 藤井秀一で

す。

平八 （平然と）耳はよう聞こえるで。

秀一 あ、すいません。あの、今朝もお会いしましたけど。

平八 正義の教え子だら。

秀一 （困って）あ、いえ。

平八 まあいいで。ちよつと煙草たばこ取つてくりよお。

秀一 は？

平八 煙草。切らいちゃったで。そこの引き出しん中にあるで。

秀一 は仕方なく指定された仏壇の下の引き出しを探す。

平八 は合羽を脱いで軒下に吊る。

秀一 が「峰」の新しい箱を取り出して平八に渡す。（平八はこの後さっそく一本取り出して一服つけ始める）

電話が鳴り出す。

平八は何の反応もしない。

秀一 ……あの、電話、鳴ってますよ。

平八 うん。

秀一 ……あの。

平八 耳はよう聞こえるで。

秀一 はい。でも……。

平八 うん？

秀一 出なくていいんですか？

平八 いい。

平八が手ぶりで灰皿を取れと指示するので、秀一は仕方なく従う。

智子が店先からあわてて駆け込んで来て、受話器を取る。

智子 （よそ行きの声で電話に出て）はい、猪原商店でございま

す。……はい。……はい……。

平八 よそ行きの声出しとらア、なア。(と秀一をつついて言う)

秀一 え?

平八 男からの電話待ったただに。

秀一 (仕方なく) はア。

智子 (電話に) ええ、たしかにその猪原でございますが……。

平八 あの声はそうに決まっとらア。(とニコニコする)

市恵が戻って来て、秀一と目が合い、二人は互いに黙礼する。

智子 (電話に) ああ、はいッ。その節はどうも。……いいえ

エ、こちらこそ。……ええ、来てますよ。(と秀一を見る)

秀一 ……。(驚いたように智子を見る)

智子 (電話に) え? あらアそうだったんですか? ……え

え、今ここにいます。少々お待ち下さい。(受話器を手で押え

て) 秀一くんに電話。

秀一 (信じられず) ……僕ですか?

智子 うん。東京のお母様。

秀一 何で?

智子 何でって。

秀一 何でここにすることがわかったんだらう。

智子 ここへ来るって言ってこなかったの？

秀一 ……。(うなずく)

智子 とにかく出てあげて。何かすごく心配してたみたいで。

秀一 ……。(躊躇する)

智子 早くッ。あなたん家の電話代もったいない。

秀一 (仕方なく電話に出て) ……もしもし? ……そう。…

ああ、ごめんさい。…何でって…シノケンの死んだ場所
に花くらい供えてやりたかったんだよ。…違うよ。…
うん、わかっている。今から出発するところだよ。今日中
には向こうへ着くよ。(イライラした調子で) …大丈夫だっ
て。一日や二日遅れたってどうってことないんだよ、あんな
もの。…いいよ、お父さんには言わないで。余計な心配か
けるだけじゃない。…今から行くって言ってんだからいい
じゃないか。(突然カッとなって) うるせえんだよッ、言うな
っついたら絶対言うなッ!(電話を切る)

その剣幕に驚いた智子と市恵は、じっと秀一を見る。

秀一は誰とも視線を合わさずに必死で興奮を抑えている。

平八もさつきからずっと秀一を見ていたが、表情はさほど変

わからない。(もしかしたら感情が表情に現れにくいだけなの
かも知れない)
しばらく気詰まりな間があった後、智子と秀一と平八が同時
に話し出す。

智子 (同時に) 秀一くん。

秀一 (同時に) あの。

平八 (同時に) 智子。

智子 (秀一と平八を見て) あ……何？

秀一 (智子と平八を見て) いや、どうぞ先に。

智子 (平八に) 何？ おじいちゃん。

平八 ふむ。(と灰皿に煙草を捨てて) ……今夜な。

智子 うん。

平八 冷や奴やっこが食いたいで。

間。

智子 わかった。

平八 うん。

平八が庭から消える。おそらく勝手口から上がって自室へ行くのである。

秀一 すいません。何か……大きな声出しちゃって。

智子 ううん。

秀一 何ですか？ さっき言いかけたこと。

智子 うん。……合宿、本当は昨日からだっただね。

秀一 ……ええ。

智子 どうして家の人に黙ってここに来たのか聞こうかと思っただけど……もういいわ、何となくその気持ちもわかるような気がするで。

秀一 言えば絶対に行くなって言うに決まってるから。あんな事故のことは早く忘れて勉強しろって。

智子 ……うん。

秀一 だから内緒にしてたんです。

智子 ……そうだね。

市恵 （秀一に）私はね。

秀一 はい？

市恵 お父さんやお母さんが、あなたにそう言いたい気持ちも、少しわかるに。

秀一 ……そうですか。

智子 あ、こちらは野村市恵先生。袋井の中学で国語を教
えてらっしゃるの。

秀一 藤井秀一です。

市恵 野村です。初めまして。

智子 父の旧いお知り合い。

秀一 ……。(うなづく)

市恵 猪原先生はね、私が今でもいちばん尊敬する先生。教師
の鑑かがみのような方だよね。

秀一 (少し気圧けおされて) そうですか。

智子 (市恵に) あ、私、ちよつとこれ。(と卓袱台の上のコップ
などを片づける)

市恵 あ、私やるで。

智子 (笑いを作って) いいで座ってて、お客さんじゃない。

智子は盆を持って台所へ去る。

市恵 寝てなくて大丈夫？

秀一 もう平気です。

市恵 (微笑みかけ) 私のね。

秀一 はい。

市恵 生徒たちが書いた作文とかね、班ノートや学級日誌に書
いた文章から私がいいなって思うものを選んでね。クラス全
員のぶん何か一つずつ選んで、それをもう一度自分たちで清
書してもらって、学期ごとにこうして手作りの文集を作っ
てるの。

秀一 へえ。(興味はない)

市恵 ほらこれ。見て。(と秀一に文集を見せる) それを届けに
来たの。猪原先生がいつもとつても楽しみにして下さってる
もんだよね。

秀一 ……。(仕方なしにぱらぱらと見る)

市恵 フフフ、生徒の名前なんかハアみんな覚えててくれてね。ほオあの子は今度はこんなこと書いてるのかとか、こいつはまだこんなことやってるのかとか、この子は文章がうまくなつたなアとか、こいつは相変わらず字が下手へただなアとか。フフ、まるで自分の生徒みたいだね。

秀一 ……あの。

市恵 え？

秀一 猪原さんって、学校の先生だったんですか？

市恵 あら、知らなかった？（意外）

秀一 （わずかに苦笑して）何となく、そんな感じはしてたけど。

市恵 ハアお辞めになってから十五年になるけど……そりゃア立派ないい先生だっただに。情熱的でねえ。

秀一 へえ……。

市恵 私が島田の高校で教師になったばかりの頃だっただけどね。野村先生も、これから先何があっても、生徒に対する情熱だけは失っちゃいかんにつて。それが最低限の資格だよね。情熱がなくなったら教師をやる資格なんてのはないだよねエつて。……フフフ。（頭を振って独言ひとりごとのように）いかんねえ。私なんかまだまだ全然ダメ。歳だけはハアあの頃の先生と同じになっちゃっただに。

秀一 ……。

市恵 あ、何か私の話ばつかで。（と頭を下げる）

秀一 いえ。

市恵 秀一くんのお父さんも立派な先生なんですつて？

秀一 別に立派じゃありません。

市恵 フフ、でも、有名な進学校の教頭先生だとかつて。

秀一 僕は父のことが嫌いです。

市恵 ……。

秀一 この世でいちばん軽蔑けいべつしています。

智子が新しいコップを盆に載せて出て来る。

智子 カルピスウ。

市恵 あアありがとね。ごめんね、智子ちゃんばっかにさせて。

智子 ううん、こっちこそこんな物しかないのでごめんね。でも

秀一 くんはしっかり水分摂らにゃいかんでね、はい。(とコ

ップを秀一の前へ)

秀一 (頭を下げて)あの、猪原さんって。

智子 何? あ、うちの父?

秀一 ええ。高校の先生だったんですね。

智子 あ……うん、そうだけど……あれ? 知らなかった?

秀一 はい。

智子 (笑いを作って)でもハア昔の話だでねエ。(市恵に)ね

え?

市恵 ええ、まア。

秀一 (二人を見て)どうして辞めちゃったんですか?

智子 あア……うん。

間。

秀一 それは、何か聞いちゃいけないようなことでしたか?

智子 (笑いを作って)ううん、そういうわけじゃないけど。

……まア、母が亡くなってからいろいろとあったもんだから。

(市恵に)ねえ?

市恵 そうね。私も、詳しくは知らないけど……。

秀一 ……そうですか。(と仏壇を見る)

智子 カルピス飲んで。

秀一 はい。

表の方から軽トラックがやって来て止まる音が聞こえる。

市恵 先生?

智子 うん、帰って来たわね。

秀一 (カルピスを一気に飲み干して) 荷物を取って来ます。

智子 さっきのジーンズとTシャツ持ってらっしゃい、アイロ
ンで乾かしたげるで。

秀一 いいですよ、これで。

智子 だってカッコ悪いら、新幹線乗ったりするのに。

秀一 どうだっていいですよ、格好なんか。

智子 いいから持って来る。

秀一 はい。

秀一は奥の部屋へ荷物を取りに行く。

市恵 (声をひそめて) ……ねえ、先生って本当はどっかお悪い
の？

智子 ううん、そういうわけじゃないけど。まアお酒をあ
まり飲まなくなっただけかしら。でもそれは歳のせいもあ
ると思うし。

市恵 (ほっとして) そう。

智子 一度検診受けておいでって口酸っぱくして言っただけ
ど、いつもオラアいいで、自分の身体のこととは自分がいちば
んよくわかっているでって、何しよ自分からはハア絶対病院な
んか行かんでね。

市恵 フフフ。

智子 そんなこと言っただけに病気になるのも私は知らんでね
エ、看病なんかしてあげないでねエって脅かしてようやっ
と行かせただに。

「ただいまア」という猪原正義まさよし(五十五)の大きな声がする。
いかにも元気そうな屈託のない響きである。

智子 (表へ) はい、お帰んなさい。

市恵 あの声は良かっただね、結果が。
智子 (笑って) みたいだね、ハア現金だでねエ。

正義が入って来る。(実は微醺^{びくん}を帯びている)

正義 (いきなり自慢するような口調で) ほらみる智子、医者だ
って何ともないって言ったぞ。まアあちこちガタは来ちゃア
いるがさ、あと三十年やそこらはしっかりもつで心配せんで
よろしいって。

智子 はいはい、よかったね。

正義 俺の言った通りだったら。

智子 そんなにイバらんだっていいじゃん、ねえエ。

市恵 フフフ。

正義 (市恵に気づいて) やアいらっしやい。

市恵 またお邪魔してます。

正義 勇太くんは元気ですか？

市恵 はい、おかげさまで。

正義 そう。(目敏^{めざと}く卓袱台の上を見て) やア新しい文集だね。
いつもありがとう。

市恵 (ハンドバッグから原稿用紙を取り出して) それからこっち
は勇太が一学期に書いた作文なんですけど。

正義 (ニコニコと) ああ、それもしっかり読ませてもらうでね。

市恵 (嬉しそうに) はい。

智子 (アイロン掛けの支度をしながら) でも自分でも安心する
ら。そうやっていっぺんちゃんど病院で診てもらえば。

正義 うん、まアな。(と笑いを作って) 藤井君は? どうし
た?

智子 いま奥に荷物を取りに。

正義 そうか。

智子 あの子の濡れた服にアイロン掛けるで、ちよっと待つて。
て。

正義 彼はまたあの場所に行ったのか。

智子 うん、ついさっきまで。徳永さんが自転車で送って来てくれたの。

正義 徳永君が？

智子 (笑って) おかしな子が道端に座り込んでるでって、と
うとう通報されちゃっただって。

正義 ハハハ、そうかそうか。

智子 (気づいて) あれ？ やだお父さん、お酒飲んだら。

正義 うん？ うん、ちよつとな。

智子 (厳しく) ジャア飲酒運転してきたの？

正義 いやいや、ほら、ついその、家へ上がって来る角の酒屋が新しい自動販売機置いたら？ だでまアあそこでちよつと祝杯をな。検査も異状なかったこんだで。

智子 もう、どうりでおかしいと思った。そんなバカ陽気で。

正義 (笑いながら) すまんすまん。

智子 (怒って) どうすんの、それじゃ秀一くん送って行けないでしよう。

正義 (うなずいて) そのことだけど、昨夜からずっと考えてただけどなア。

智子 何よ。

正義 藤井君、しばらくうちで預かれんかな。

智子 え？

正義 あの子なア、どうしてもあのまま放つとけないような気がするだア。

智子 だって予備校の合宿があるのよ。さつきもね、秀一くんのお母さんから電話があったのよ。

正義 何て？

智子 合宿本当は昨日から始まってただって。これ以上勉強遅れさせちゃ悪いんじゃないの？ 四当五落とかっていうくらいだ。

正義 そんなのは愚の骨頂だア。本当の勉強じゃないでエ。

秀一が濡れたジーパンとスポーツバッグを抱えて入って来て、正義に黙礼する。

智子 あ、貸して。

秀一 (ジーパンを渡して) すいません。

智子 すぐすむからちよつと待っててね。

秀一 はい。

正義 藤井君、私ね、考えたんだけど。

秀一 聞こえてました。

正義 あ。あアそうか。それじゃアどうかいね？

秀一 ……はあ。

正義 しばらくこの家にいてみないか。何なら夏休みの間中ずつといてくれてもいい。しばらくこの家に暮らしてさ、行き先もたきやあの事故の現場に何度だって通ってみりゃアいいじゃないか。そうやって、少しでも自分の気がすむまでさ、あの事故のことをじっくり考えてみりゃアいいと、私は思う。

智子 お父さん。

正義 受験勉強なんてのはその気になりゃアここで独りだつてできることだ。町役場に行きゃア図書室だつてあるし、君には言つてなかったが、私アこう見えても十五年前までは高校で英語を教えてたでね。勉強のことも少しは力になれると思う。

秀一 ……。

正義 どうかいね？

間。

秀一 ……どうして、そんなに熱心なんですか？ 他人のことなのに。

正義 (笑つて) 私ア他人のことだとは思つてやせん。あの現

場に私が通りかかったのも何かの縁だと思ってるでね。

秀一 ……。

智子 (アイロンを使いながら正義に) あんまり無理強いせん方がいいじゃないの？

正義 (智子に) 無理強いじゃあらすかい。そうしてみたらどうだつて提案してるだけだに。(秀一に) なア？

秀一 ……。

正義 (市恵に) あア野村先生はこの藤井君のこと。

市恵 ええ、さつき智子ちゃんからだいたいのは。

正義 そう。じゃア先生はどう思われますか。

市恵 ええ……。(困る)

正義 私はね、今の藤井君には予備校の合宿だなんてそんな無味乾燥なものに参加するよりも、不幸にして亡くしてしまった友人のことをゆっくり考えてみるっていうことの方が、もっとずっと大事なことのように思うだけだね。

市恵 ええ、それはそうなんでしょうけど、ただ……。

正義 はい。

市恵 私は、秀一くんのご両親が事故のことを早く忘れなさいつて言うのもわかる気がするんですけど。

智子 そうよ。秀一くん、私は、こんなことであなたがいつまでもクヨクヨしてても、現実的にはいいことなんて何も無いと思うでね。

正義 (秀一に) そんなことはないぞ。

智子 そうかな。私は早く気持ちを切り替えて、長野の合宿に行つた方がいいと思うけどな。

正義 野村先生も同じですか。

市恵 (言いにくそうに) 私も、あの、いちばんつらい時をそうやって何かに夢中になつて乗り切つてしまえば、あとは時間が解決してくれることなんじゃないかって……。そういうふうにご両親が願うのも親心なんじゃないかと……。

正義 ……ふむ。

智子 野村先生の言う通りだに。死んじゃった子は現実にハア
帰らないだで。そのことだけは、もう誰にもどうにもできな
いことでしょ？ こういう言い方は残酷かもわからんけど
……

正義 そんなでも私は、そんなに簡単に気持ちを切り替えるべき
じゃないと思うだなア。

智子 誰も簡単だなんて言っていないに。

正義 (秀一に) どうだいね？ 君自身はどう思う？

問。

秀一 ……僕には、よくわかりません。

問。

正義 うむ……そうか。

正義は立ち上がって出て行く。

一同が何だろうと思っていると、彼は台所から清酒の一升瓶
と湯飲みを二つ持って戻って来る。

智子 (驚いて) お父さん。

正義 そんな声出すなよ。

正義は湯飲みを酒を注いで一つを秀一に差し出す。

正義 やらんか？

秀一 ……。(頭を下げるが、手はつけない)

智子 駄目よ、飲んだら。

正義 今日だけ大目に見てくれや、智子ちゃん。

智子 もう酔っ払ってる。

正義 藤井君、君ね、昨夜はあまり寝てないら。

秀一 ……はい。

正義 私もそうだ。明け方までどうにも眠れんかった。

秀一 ……。

正義 死んだシノケンのことを考えてた。(自分の酒を飲む)

秀一 ……。(正義を見る)

正義 あいつはいい奴やつだよなア。あんないい奴が何で死んじま
つただいなア。

秀一 ……。(目を伏せる)

正義 (市恵に) 私はね、あの事故のあと二度ほど藤井君に葉
書を書きました。

市恵 (うなずいて) 聞きました。

正義 簡単な見舞いの葉書です。彼は右足を骨折してたもんで
ねえ。

市恵 ああ……はい。(とうなずく)

正義 その葉書に藤井君が返事をくれた。長い手紙でした。便びん
箋せんで二十五枚もあった。(智子に) なア？

智子 ……うん。

正義 そこにシノケンのことがいろいろ書いてあった。シノケ
ンというのはあの事故で亡くなった彼の友人の名前です。篠
田健三。略してシノケンです。

市恵 ……。(うなずく)

正義 (秀一に) 野村先生にも話してもいいかいね。

秀一はチラリと市恵を見て少しだけ躊躇するが、うなずく。

正義 藤井君とシノケンは小学校の同級生だったそうです。そ
の頃は格別に友だち同士というわけでもなかった。シノケン
は少し不良っぽい奴だったし、あまり話したこともなかった。
まアたまたま六年生のとき同じクラスだったというくらい
のことでした。今年の春休み、二人は偶然再会しました。予備

校の講習からの帰り道で藤井君は偶然シノケンを見かけた。そこはバイクの修理工場の前でした。シノケンはオートバイの修理工になっていたんです。近頃流行りの、あれ何つつたいなア？ ほら、そういう修理工の人なんかがよく着てる……

智子 ツナギ。

正義 そうそう、そのツナギを着てね、彼はもう一人前の修理工としてそこで働いていた。ちょうど修理の終わったバイクをシノケンが表まで引っ張り出して客に引き渡しているところだったそうです。藤井君はそれをしばらくじっと見ていた。おそろくね、藤井君にはその時の彼がひどく格好よく、その、ちよつと立派に見えただと思っただなア。(秀一に微笑みかけ) そうだから？

秀一 ……。(うなづく)

正義 フッフ、私にも覚えがあるでね。一足先に社会に出て働いてる友人たちが、ある時期にはバカに格好よく見えた。もう一人前の大人の男に見えて、ちよつと眩まぶしいような気がした。……まア、それで藤井君はちよつと気後れしながらもシノケンに声をかけた。するとシノケンはずいぶん懐かしそうな嬉しそうな顔をしたんだそうです。まるで昔から大の親友

同士だったような。……フフ、これも何となくわかるな。こっちはそれはどのつき合いじゃないと思っただに、向こうじゃずいぶん親しいつもりでいたらしいなんてのはね。

市恵（うなずいて）昔のクラスメートに会ったりするとよくそういうことが。

正義 あるでしょう？ とにかく二人はそこではばらく立ち話をして、それからもう仕事は終わりだということで、彼は藤井君を喫茶店に誘った。コーヒー代もシノケンの奢りおごだった。

そうやってとにかくその日初めて、二人は実にいろいろな話をした。藤井君はシノケンの家が母子家庭だったということも初めて知りました。お父さんが少しやくざな人でね、シノケンが小さい頃に女を作って家を出て行っちゃってたんです。それでお母さんがずっと水商売の仕事をしてシノケンを育てたんです。シノケンにも少しお父さんゆずりのところがあつただね。入学した工業高校をすぐに辞めちまって、一時期は暴走族の副リーダーのようなこともしてたらしい。しかしまア今はそういう仲間からは抜けて、こうしてマジメにやっているんだと。この仕事は自分に向いている。気に入っている。彼はそんな話をしたそうです。それから次の日曜日にバイクでツーリングに行くという話も。（秀一に）ねエ？

秀一（うなずいて）……大井川鉄道のSLを見に行くけど、一緒に行かねえかって。

正義 ほら一昨年から観光で走らせてるでしょう。けっこう全国的にも話題になってるらしいだね、あれが。

市恵 ……。（うなずく）

正義 でもね、それが日曜日じゃなくて別の日だったら、例えばその前の日の土曜日に行かないかといわれたのなら、もしかしたら自分は断っていたかも知れない。そう藤井君は書いてます。

市恵 ……。（秀一を見る）

秀一 ……。

正義 日曜日には毎週予備校の模試があるんです。つまりね、よし、そいつを一度サボってやれと思ったんだそうです。まあささやかな反抗です。

市恵 ……反抗、ですか？

正義（うなずいて）藤井君の学校は進学校で、一年生の時から生徒も教師もみんな目の色を変えて受験の準備をしてる。睡眠不足でふらふらになっても、みんな四当五落なんて言うてる。五時間寝る奴は落ちて四時間しか寝ない奴が受かるってことです。毎日が息苦しいように思う。イヤだなあと思う。

しかしやめたくてもやめられない。そもそも受験に疑問なんて感じてたらそのぶんまわりの連中からどんどん遅れてしまう。事実この頃は成績が落ちて来ている。自分では精一杯勉強してるつもりなのに、そうなって来ている。

秀一 ……。

正義 実は藤井君のお父さんもまた別の有名な進学校の教頭先生をしてらしてね、だから彼の受験にはことのほか熱心なんです。

市恵 ……。(うなづく)

正義 だから家でも学校と同じことを言われる。あとたった一年しかないんだぞ、この一年で自分の一生が全部決まってしまうんだぞ、こんなことでどうするんだと言われる。だてまア……模擬試験をサボってシノケンとバイクに乗って遊びに行くというのは、そういうものすべてに対する藤井君なりのささやかな反抗だったわけです。

市恵 ……。(うなづく)

正義 そうして二人はこの川根町までやって来た。そこで……不幸なことにあの事故を起こしてしまった……。

秀一 ……。(湯飲みを取り、一気に飲み干してしまう)

智子 ……。(その飲みっぷりを見て、あアと思う)

正義は二つの湯飲みにもう一杯ずつ注ぐ。

正義 ……ここへやって来る途中でね、二人はまたいろんな話をしたそうです。それでね、ここがバカにいいんだが、模擬試験をサボって来たんだという話を聞いたシノケンはね、藤井君に説教したっていうんですね。

市恵 ……お説教？

正義 (うなずいて) おまえね、模試をサボるだなんていけないよって。そんなことはもう今日だけにしとけよって。そりゃア受験で人生の全部が決まっちゃうだなんてそんなバカなっで自分もそう思うけど、でも、それでもおまえががんばれよって。俺と違って、おまえはうんと頭がいいんだからよって。

秀一 ……。

間。

正義は自分の酒を飲み、秀一をじっと見つめる。

正義 ねエ？ いい奴じゃないか。私はそう思うな。友だち甲^が

斐^いのあるいい男だよ、そのシノケンって奴は。

秀一 ……。(目を伏せる)

正義 そんな奴のこと、そんなに早く忘れちまえるわけがないだア。忘れちまっつていいわけがないだア。

間。

正義は残った酒を飲み干して、もう一杯注ぐ。

秀一も再び自分の酒を飲もうとする。

智子 (慌てて) 駄目、秀一くんはもうやめときなさい。

正義 いいじゃないか。(秀一に) そのかわりさつきみたいにな

いっぺんに飲み干しちゃ駄目だでね。ゆっくり少しずつ飲ま

にやいかんよ。

秀一はうなずいてゆつくり飲む。

智子 (呆れ顔で正義をにらみ) もう、バカなことばっか言うだから。

智子はさっと立ち上がって店へ下りて行く。

正義 どうだいね? しばらくこの家にいてみちやア。

秀一 ……。

市恵 ……先生。

正義 うん?

市恵 私にも何かお手伝いをさせて下さい。

正義 (ニッコリ笑って) そりゃア嬉しいなア。

市恵 (秀一に) 古典と現代国語なら、私でも少しは力になれると思うで。

正義 うん、野村先生ありがとう。(と市恵に頭を下げる)

智子が店からサキイカだの柿の種だのポテトチップスだの手当たり次第に抱えて戻って来て、せわしげにその袋を片っ端から開ける。

智子 (それらの袋を秀一の前に置きながら) とにかく何でもい
いからツマミも食べにやいかんよ。お酒だけガブガブ飲んじ
や駄目だに。

正義 うん、智子もありがとう。

智子 もう。(プリンである)

正義 (秀一に) なア、そうしてみないか?

秀一は酒を飲み干した後、正義をじっと見る。

長い間。

秀一 (ついに) 手紙には書かなかったことがあるんです。

正義 うん？

秀一 (苦しそうに) 本当は……あの時運転してたの、僕です。事故の時、シノケンはお後ろに乗ってたんです。だから……あの事故を起こしたのは僕です。シノケンじゃない。僕が無免許でバイク運転してて事故ったんです。そのせいで……シノケンは死んだんです。(小さく) 僕のせいだ。

間。

正義 (静かに) どういうことかいね。

秀一 ……あの場所から山の上へ上ったところに広い場所があるって。

正義 (うなずいて) 製材所の跡地だ。

秀一 そこでシノケンがバイクの運転を覚えてくれたんです。

僕が、頼んだから。

正義 ……。(うなずく)

秀一 教えてもらって……何度か一人で走ってみて、上手うまくいったから……それでシノケンがお後ろに乗って、山の下まで下ってみようってことになって、初めはノロノロ走ってたんだけど、だんだん調子が出てきて……シノケンもスピード上げろ上げろっていうし、何かスカッとしてすぐ気持ち良かったし、どんどん調子に乗って走って……それで、あの場所
で……。

間。

正義 ……そうか。

秀一 ……。(うなずく)

正義 （静かに）しかし君はそのことを警察には言わなかっただね？

智子 お父さん、もういい。

正義 そうだね？

秀一 ……。(うなづく)

智子 お父さん。

正義 ……そうか。

間。

秀一 （懸命に自分を抑制しながら）警察の人は初めから無免許の僕が運転したとは疑ってもしないみたいだったし……救急車の中では、シノケンの様子が重症だったことでこっちは頭が一杯だったし……。

正義 ……うん。

秀一 いや本当はそれも少し言い訳が入ってるっていうか……本当は、その時から何となくいろんなものが恐くて言えなかったんだけど……。

正義 ……。(うなづく)

秀一 バイクでこけた時も一瞬すごく恐かったけど、でも……シノケンが死んじゃうなんてその時は全然思わなかったから……。(ついにぼろぼろと泣き出して) ついさっきまで一緒に笑ったり、一緒にギャーギャー叫んだりしてたシノケンが、まさかあのまま死んじゃうなんて全然思わなかったから、だから……病院でシノケンが死んだって聞かされた時は、何だかよけい恐くなっちゃって……。

間。

正義 今まで誰にも話してないのか？

秀一 （首を振って）シノケンの四十九日が終わったあと……父

にだけ。

正義 ……うん。

秀一 ……そうか……。
それなら、父は、そんなこと絶対誰にも言うなって。これからもう一生誰にも言っちゃいけないだとか、言えば受験に失敗するどころじゃない、僕のこれからの人生がもうそれで全部狂っちゃうようなこと言ってる。

正義 ……うん。

秀一 それでも、シノケンのおふくろさんには本当のこと話さなきゃいけないんじゃないか、全部話して、謝らなきゃいけないんじゃないかって言ったら、それも、父が自分で話すから僕からは何も話しちゃいけないって言われて……。それで父が向こうへ出かけて行って話して来て、ちゃんと向こうのお母さんにもわかってもらって来たからもう大丈夫だとか言ってる……。そのあとシノケンのおふくろさんからも手紙が来て……。それには、もう息子は帰って来ないのだから、今さら僕のことを警察に話す気はありませんだとか、お互いの将来のためにこの事故のことはもう忘れましようとかかって書いてあって……。

正義 ……そうか。

秀一 ……（屈辱感に震えながら）父が示談にしました。お金を払って……。シノケンのおふくろさんにお金をたくさん払って、そんなふうに言わせたんですよ。（カッとなって）僕のためにッ、大事な息子の将来のために金を払って僕がしたんじゃないことしたんだッ！ シノケンのおふくろさんだってお金をもらって忘れるって言ったんだッ。シノケンを殺したのが僕だっことを忘れてやるって。僕の父からお金をたくさんもらったからッ！

間。

正義 ……（静かに）わかった。君の言わんとしたことは、よくわ

かった。

電話が鳴り出す。

しばしの躊躇の後、智子が受話器を取る。

智子 (よそゆきの声ではなく) はい、猪原商店でございます。

……あ……はい。(声の調子が重く変わって) ……はい、少々

お待ち下さいませ。(受話器を手で押さえると正義と秀一を交互に見て) ……秀一くんのお父さん。

秀一 (再びカッとなって) ちくしょう、親父おやじには言うなって言ったのにッ。(智子に) もういないって言って下さい。

秀一は、スポーツバッグとジーンズを引つ、掴つかむと慌ただしく三人に黙礼し、あッという間に店を抜けて外へ飛び出して行く。

智子 秀一くんッ。

市恵 待ちなさいッ。秀一くんッ。

市恵が秀一を追って飛び出して行く。

智子 (受話器を押さえたまま) どうしよう？

正義 おまえも追いかける、電話は私が出るで。

智子 うん。(と渡す)

正義 藤井君にな、お父さんにはうちで預かせてもらおうように私がちゃんと話すのでって。

智子 わかった。

智子は勝手口とおぼしき方向から出て行く。(その後、庭のガラス戸越しに自転車を引つ張り出して行く姿が見える)

正義、少し間をおいてから話し始める。

正義 (酔った調子を隠しつつ電話に) もしもし? ……あ、猪

原でございます。いえいえ、こちらこそ……ええ、そうなんです、昨日ふらりとこちらにやって来ましてね。……あアそうだったんですか。合宿というのは昨日からだったんですか。……はア、はア、なるほど……あの藤井先生ね、すみません、お話の途中でいきなり突飛な提案だとは思いますが、その、秀一君をですね、しばらくわが家にお預け願えませんでしょうか。……ええ、そうです。……あの藤井先生、私たちね、いま秀一君から事情を聞きました。……ええ、話してくれたんです、全部。……それで、私はね、やっぱりもう少し彼に考える時間を与えてやった方がいいと思うんです。……ええ、もちろんそれも大事でしょうが……はア、しかしまアその点についてはですね……(急に感情高ぶって語気強く)何を言ってるんですッ。遅れたっていいじゃないか一年や二年。彼はね、若いんだ。そんなことはこれからいつくらだって取り返しがきくんだ。そうですよ、これからいつくらだって……そうじゃない。彼に何かを吹き込もうだなんてそんなことは思っちゃいけません。ただ彼自身にね、もっとゆっくり考えさせてやりたいと思ってるだけなんだ。……ええ……ええ……そうですよ。しかり。あなたのおっしゃる通りだ。彼はまだやっと大人の入り口へたどりついたばかりです。秀一君の人生はまさにこれからです。だけどね、その人生の入り口で、彼は自分のことがもう嫌いで嫌いでたまらなくなっている。これは可哀想じゃないかね。可哀想だよ。……馬鹿野郎ッ、そうじゃないッ。お金とかそういうことじゃないんだ。私はね藤井さん、ただそういう生徒が見ちゃおられんですよ。彼の力になってやりたい、何とかして励ましてやりたいって思うってるだけです。本当にそれだけです。どうか彼のことは私たちに任せて下さい。ご心配なさらずに。ごめん下さい。

正義、最後はいささか強引に電話を切る。

彼は湯飲みに残った酒を飲み干すとごろりと横になる。それからしばしの間、じっと動かない。陰鬱いんうつに、何かにじっと耐えているようにも見える。

表では相変わらず蝉の声がかしましい。

再び遠くから汽車の汽笛が聞こえてくる……。

正義は上半身を起こすと、上腹部を少し痛そうに押さえる。何度かそこをさすりつつ、深呼吸を三つほどして、それからシャツのポケットからハイライトの袋を取り出すが、中身は空だと気づく。

仏壇の引き出しを探してみるが、買い置きが見つからないので、さきほど平八が使っていた灰皿からシケモクをつまみ出して火をつけると、仏壇の写真を眺めながらぼんやりと吸う。

正義

(独言) ……「屑くずたばこ集め喫へれど志す高きかもの彼物忘ら

ふべしや」か。(また一服吸って) ふーッ。(と天井に向かって吐き出し、そのまま大声で)「高き彼物忘らふべしや」ときちやうね、へへへ。

平八がのそりと入って来る。

平八

何をさっきから大きい声出してるだ?

正義

うん? ああ、ハハハ、ちよつとひさしぶりにカーッと

しちゃったでエ。(シケモクで指を焼いて) 熱ッ。(とあわてて煙草を消す)

平八

バカだやアそんなもの吸って。

正義

ちよつと切らいちやったで。

平八

店から取ってくりやいいじゃねえか。

正義

それも面倒だったでエ。

平八は「峰」を取り出して正義に一本すすめ、自分も一本くわえる。

正義、自分の煙草につけた火で平八の煙草にも火をつけてやる。

遠くで汽笛の音。

正義 (一升瓶を示して) 飲むけ？

平八 ああ。

正義 じゃ湯飲みか。(と立とうとする)

平八 これでいい。(と秀一の湯飲みを取る)

正義 ……うん。(と酒を注ぐ)

平八 今日夕立が降ったでなア。

正義 うん。

平八 もういっぺん下草取りに行くでエ。

正義 ああ。

平八 (旨うまそうに飲み) 明日からそろそろ三番茶を摘むでな。

正義 わかった。

電話が鳴る。

正義 ……。(少し身構える)

平八 ……智子は？

正義 ちよつと出てる。

平八 じゃ、放つときゃいい。

正義、煙草を消して、決然として電話に出る。

正義 (電話に) 猪原です。(とその声に少々険しい感じがある)

……もしもし？ ……もしもし？ ……(受話器を置いて)

切れた。

平八 智子のコレだア。(と親指を出す)

正義 (笑って) まさか。

平八 決まつとらア。

正義 智子に恋人ができたのけ？

平八 ああ。気づかなんだだか。

正義 うん。

平八 おまえは昔から鈍いでなア。

正義 いつから？

平八 ハアふた月やそこらにゃなるら。

正義 (呆れたように) どうしてそういうことがわかるでエ。

平八 ちよくちよく智子に手紙が来とらア。

正義 手紙？ 誰から。

平八 差出人は書いてないでエ。

正義 そんなじゃ誰かわからんじゃん。

平八 だでコレ（親指）だつていうだア。

正義 ……しかしそんな、俺にも紹介できんような男か。

平八 違うだア、言いたくても言い出せんているだア。

正義 ええ？ 何で。

平八 バカだなおまえは。智子が出てったらこの家はどうなるだア。

正義 ……ああ。

平八 おまえがいつまでたつても新しい女房もらつてやらんもんだで、智子だつてずっと嫁に行けんているだア。

正義 ……。

平八 おまえ、どうするだア。

正義 どうするつつつたつて……はアどうしようもないら、五十五だで俺ア。

平八は酒を飲み干して立ち上がる。

平八 （行きかけて止まり）あの、時々やって来る女の先生はど
うでエ？

正義 野村先生のことけ？

平八 おまえだって嫌いじゃないだら。

正義 俺がよくても向こうに失礼だよ、そんなの。

店の方から智子と市恵が秀一を連れて帰って来た気配がする。

智子 （オフで）ほら、着いたわよ秀一くん。

市恵 （オフで）大丈夫？ こっちに掴まって。

平八 まアこのことは真剣に考えとかにゃおえんぞ。

平八が出て行く。

入れ違うようにして千鳥足の秀一を智子と市恵が両側から支
えつつ現れる。

正義 おう、大丈夫か？（呑気のんきな調子がある）

智子 （批難がましく）何言ってるの。お父さんがお酒なんか飲
ませるからこんなになっちゃっただに。

正義 うん、すまんすまん。

市恵 気持ち悪くない？

秀一 平気です……。ちよつと地面がぐらぐらするだけです

……。(と座る)

智子 水とおしぼり持って来る。

市恵 洗面器もあったほうがいいら。

智子 そうだね。

智子と市恵は台所へ去る。

秀一の神経にはあきららかに酒による幸福感が訪れている。
間。

正義 ……吐き気はないか？

秀一 ありません。今は何だか、いい気持ちです。

正義 (苦笑して) そうか。

秀一 お酒で酔っ払うって、こういうことだったんですね。

正義 (うなずいて) そうだ。

秀一 本当にこんなふうになるだなんて……何か可笑しいです。

正義 酒を飲んだのは初めてか？

秀一 はい。

正義 そうか。それは私が悪かったなア。

智子と市恵が水とおしぼりと洗面器を持って戻って来る。

智子 はい、お水飲んで。

秀一 ……。(二口飲む)

智子 もっと。

正義 そんなに無理に飲ませんでいい。今がちよつどほろ酔い

加減ってやつだ。(秀一に) なア？

秀一 はい。

市恵 本当に大丈夫？

秀一 大丈夫です。

市恵 私が追いかけていたら、秀一くんの身体が途中から急にグラグラしだいで、はアビックリしちゃっただけに。

秀一 自分でも変だなアってビックリしました。

正義 飲んで、あんなふう^にに走りヤアあつという間に酔いがまわるでなア。

秀一 知りませんでした。

正義 昔、金がなくて飲めなかった頃にはな、焼酎しょうちゆうをコップ半分飲んだところでみんな角の電柱まで走ったでエ。で、戻って来て残りの半分を飲む。そうするとコップ一杯の焼酎でベロベロべろべろになれたでね。

智子 またバカなこと言ってる。

秀一 今度やってみます。

智子 秀一くんッ。

正義 馬鹿野郎そういうことは絶対にやっちゃいかんぞ。下手へたすりゃ死ぬでなア。

秀一 ……じゃ、しません。

正義 うん。酒はな、どんな時でもゆっくりと味わって飲め。

秀一 はい。

智子 ……。(ため息をつく)

間。

市恵 (秀一に) さっきの話なんだけど……。

秀一 はい。

市恵 私は、やっぱり警察にきちんと話したほうがいいと思う。

秀一 ……。

市恵 あなたがしたことは、やっぱりあなたがしたことなんだもの。何もなかったことには出来ないでしょ？

秀一 ……。

間。

智子 うん、私も、そう思うな。それに……そのほうがきつと
秀一 くんは楽になれるんじゃないかと思う。

秀一 ……。

問。

正義 ……正直言っつね。

秀一 ……はい。

正義 私には、どつちがいいだかわからんだよ。私自身も、正
直、君の話聞いて打ちのめされてる。どうすりゃいいとも
言っつやれん。(正座して) ……すまない。私は実に非力で
す。さつき電話で君のお父さんには大きなことを言っつたがね、
実際には何をしてやればいいだかわからない。恥ずかしいと
思う。(頭を下げる)

秀一 ……。

正義 (市恵と智子に) だけでも警察のことはね、これは藤井君
自身が考えて決めればどつちでもいいことだ。私はそう思う。

智子 ……。(そうかなアと思う)

市恵 ……。(ゆっくり考えて、うなづく)

正義 (再び秀一に) それよりもいいかね、大切なことはね。

秀一 はい。

正義 いま野村先生が言っつたことだ。つまりね、君のしたこと
は、それはやっばり君のしたことなんだ。なかつつことに
は出来んのだ。

秀一 ……はい。

正義 そのこととは君はハア一生つき合っつてゆくしかないだ。
いつまでもいつまでも考え続っつてゆくしかないだ。あの事
故のことは、それはハア君という人間の一部分なんだね。
これからみずつと、大事にするより仕方がない。

秀一 ……。

正義 どうだいね。やっぱり……この家にしばらくいてみんなね。私も一緒に考えてみるで。

秀一 ……。

正義 デイシプリン、デイシプリンだよ、君。

間。

秀一 ……父は、電話で何て？

正義 うん……。

秀一 ……あの親父が、ここにいること許してくれるなんて。ちよつと考えられないけど……。

正義 うん……それなんだがなア……。

智子 どうだったの？

正義 うん……。

間。

智子 まさかお父さん。

正義 すまん。つい、ちよつとな。

智子 (驚いて) 喧嘩けんかしたの？

秀一 (驚いて) うちの親父とですか？

正義 途中でついエキサイトしてな、ちよつとこう、馬鹿野郎みたいなことを……。

智子 馬鹿野郎なんて言ったの？ 秀一くんのお父さんに？

正義 うーん、言っちゃったような気も……。

智子 どっちなのよ？ 本当に言っちゃったの？

正義 言った、たぶん。

智子 お父さんッ。

正義 すまん、あとで電話しておまえのほうから……。

智子 イヤよ、ちゃんと自分で謝ってよ。

正義 うーん……。(参ったなア)

すると、秀一がくすりと笑う。

正義 おい、笑わないでくれよ。私もまずかったなアと思ってるだけ。

不可解な可笑しさが急に込み上げてきて、大笑いしてしまう秀一。

正義 (情けない) おい、そんなに笑うなったら。

しかし秀一の哄笑こうしょうは止まらない。まるで今まで抑圧おさされていた彼の中の何か^{こころ}が急に噴き出したかのように、秀一は腹を抱えて笑い続ける。

正義 (ますます情けなく) ちえッ、元はといやア君のためにした喧嘩けんかなんだぞ。

すると、突然市恵がコップに残った水をぴしゃりと秀一にかける。秀一はビククリして笑い止む。

正義と智子もそれを見てビククリする。

市恵 (涙目になって) 笑うなんて失礼じゃないのッ。猪原先生があなたのためを思って一所懸命なさったことでしよう。それを何ですか、そんなバカ笑いをして。先生をバカにしたら私が許しませんよッ。

その市恵の剣幕に気を呑のまれてしまう一同。
間。

秀一 (正座して正義に頭を下げて) ……すいません。

正義 うん？ あ、いや、いいんだ。こちらこそ君のお父さんにはたいへん失礼した。(とこちらも正座のまま頭を下げる)

市恵 それから秀一くん。

秀一 (ビクリとして) はい。

市恵 あなた、予備校の合宿に行くの？ それとも先生のお宅にご厄介になるの？ どっちかはつきりしなさい。

秀一 はい……。

市恵 どっちなの？

問。

秀一 (智子に) ……あの、よろしく願います。(と頭を下げる)

智子 あ、はい……。

市恵 智子ちゃんも本当にそれでいいだね？

智子 え？ あ、はい。(秀一に) あまりお構いはできません

けど、こちらこそよろしく。(と頭を下げる)

市恵 それともう一つ。

三人 (思わず同時に) はい。

市恵 秀一くんです。

三人 (同時に) あ、はい。

市恵 あなたが自分の父親をどんなふうにおおうとそれは構わ

んけど……シノケンのお母さんのことまで悪し様に言う資格

はあなたにはないでね。

秀一 ……。

市恵 自分のお腹痛めて産んだ子が自分より先に死んだんだで

ね。どんだけお金積まれたってとても納得できるようなことじゃないだよね。お母さんがあなたの将来を考えてくれたのは、本当に本当に尊いことなんだよね。汚いことのように言うのは罰当たりだに。

秀一 ……。

市恵 わかったかねッ？
秀一 はい。

正義がさつと真顔で立ち上がる。(彼は市恵に感動したのである。しかし、市恵は自分が出過ぎたことをたしなめられたのだと思う)

市恵 (語気弱くなって) わかったなら、それでいいけど……。

正義 (市恵を見下ろして) 野村先生ッ。

市恵 あ、すみません。(と頭を下げる)

正義 あなたはもしや、私の妻になつてはくれぬだろうか？

市恵 へ？

智子 ええーッ？

正義 (真っ赤になって) やっぱり駄目ですか、私じゃア。

智子 お父さん、いきなり何を言い出すのよ。

市恵 はい、なります。

智子 野村先生。

市恵 あの、ふつつか者ですが、どうぞよろしくお願いいたします。

正義 (再び正座して) いえ、どうぞこちらこそ。

智子 (怒って) お父さん、そんなこと酔っ払って言うことじやないのよ。野村先生に失礼じゃないのッ。

正義 (独言のように) 失礼は承知だア。だで少しくらい酔った時でなきゃこんなことは言えんだア。

市恵 (真っ赤になって) そう、いいのよ智子ちゃん。少しくらい酔っ払ってなきゃ先生こんなこと私には言って下さらんで。

智子 お父さん、こういうことでふざけちゃいかんに。あとで傷つくのは野村先生のほうなんだね。

正義 俺は真面目だ。シリアス・アズ・アイ・キャン・ビーだ。

智子 でも、あんまり唐突じゃないの、これじゃア。

正義 唐突に好きになつただ。フォーリン・ラブ・サドンリー

だ。

市恵 (嬉しそうに) はいッ。

秀一の哄笑が再び爆発する。

智子 秀一くん、笑っちゃいかん。

秀一 アハハハ。

智子 笑わないでッ。(しかし秀一の笑いは止まらない) ……もうッ。

秀一は腹を抱えて笑い続ける。

正義と市恵もつられて笑顔になってしまう。

正義 (智子に) おまえも新しい恋人を今度家に連れておいで。

智子 え？

正義 (笑って) 俺だって朴念仁ぼくねんじんじゃないでな、気づいとらん
と思ったら大間違いだでなア。

智子 お父さん。

市恵 智子ちゃん、やっぱりそういうひとが出来たの？

正義 それとも俺には紹介できんような男なのか？ そんな奴
だったら許さんぞ。

智子 ……。

電話が鳴る。

正義 ほら恋人だぞ。

智子 違うよ。

正義 さつきもかかってきたで。

智子 (顔色変わって) 嘘。

正義 嘘かどうか聞いてみりゃいいさ。

智子 何か話した？

正義 いいや、だけど、ああそうだ、いつそ今から彼も家に呼んじゃやどうか？ ねエ？

市恵 (嬉しそうに) ええ、そうしたら？ 智子ちゃん。

正義 カム・トゥー・ジス・ハウスだ、ビー・ワンノブ・アスだ、ハハハ。

智子、この混乱を振り払おうと頭を振りつつ電話に出る。

智子 (電話に) もしもし？ ……あ、はい。そう、私です。

……そうなの、今ちよつと取り込み中で……何がって、ハアとても一口じゃ言えない。それより、ねえ、さっき家に電話した？ ……ウソ、それで何か話した？ ……そう。……うん、それは駄目、絶対に駄目ッ。いまあなたが家に来たら絶対とんでもないことになるから。とてもそんな状態じゃないのよ。……そうね、あと一週間。せめてあと一週間たてば少しは落ち着くと思うけど……うん、そう。お願い。あと一週間待って……。

三人の笑顔と智子の混乱のうちに。

——幕。(第一幕の終わり)

第二幕

前場より一週間後の午後四時半を回った頃。

奥の部屋からオフで小さく秀一の声が聞こえている。どうやら英語の(リーダーの)教科書を朗読しているらしい。

智子が少しはわかるような、思いつめたような声で電話をしている。

智子 (電話に) ……うん。 ……うん。 ……それでこっちは何時頃? ……そう。 ……うん、わかった。待ってます。

(ふーッと長い息をつく) ……ううん、そうじゃないけど……

(間) ……うん。 やっぱり少しあるかな。 だって……やっど好きになった人がよりによって片山さんだっただなんて……ごめんなさい。 私まだやっぱり少し怖い。 ……うん、どうしても。 だって……どうやってあなたのこと紹介したらいいのか、やっぱりわかんないもん。 ……うん、お父さんあのことにについては家では一言も。 ……それはもちろん、片山さんが恐いっていうのもよくわかります。 ……でも……私も恐い。 ……(間) ……何かね、ブラックホールみたいな感じがするの。 ……そう、ブラックホール……お父さんの中にある……ときどき、そんなふうに思うの……。

奥からステテコ姿の平八が現れるが、智子は気づかずに通話を続ける。

智子 (電話に) ……そうね。 ……うん、しっかりする。 ごめんなさい。 ……じゃア待ってるから。 ……え、本当? 言えば勇気出る? ……うーん、そうかなア。(と小さく苦笑して) ……うん、わかった。 ……じゃ言うに。(小さく) ……愛してる。 ……聞こえた? ……うん、じゃアあとで。(そっと受話器を置く)

平八 智子。

智子 (死ぬほど驚いて) えッ? ……あアビックリしたア。 いやだおじいちゃん、もしかして聞いてた?

平八 ビックリこいたのはこっちだア。

智子 え? 何が?

平八 何がじゃあらすかい。 帰って来て風呂入らすかと思ったからおまえ、熱くて入れやせんじゃねえか。

智子 え? あ、ごめーん、ガスつけっ放しだったア。

智子はあわてて風呂場へ去る。

平八（独言） なアにやってるだア。男が来るでって、ハア浮かれてるだら。

平八はため息をつき、文机の上にある卓上ラジオのスイッチを入れる。

しばらくいじってみるが、うまくチューニングできずに、聞こえてくるのはノイズばかり。

平八（独言） ……どうやるでエ、こりゃア。

智子が戻って来る。

智子 いま水出してきたで、もうちよつとだけ待って。

平八（ラジオをいじりながら） うん……。

智子 何？ ラジオ聴くの？

平八 野球聴かすかと思って。

智子 野球はまだだら。六時頃からじゃないの？

平八 そうか。（とスイッチを切る）

平八、仕方ないので虫眼鏡で卓袱台の上の新聞を読み始める。
間。

智子 ……ねえ、おじいちゃん。

平八 うん？

智子 ……うん。

平八（顔を上げて） 何だア？

智子 お父さんのことだけどさ……。

平八 うん。

智子 お父さん学校辞めた時のこと、おじいちゃん何か聞いてる？

平八 何をまた古いこと。

智子 ……うん。

平八 どうしたでエ。

智子 うん、あんまりそういう話この家でしたことなかったなアって思つて。

平八 うむ…別に聞いちゃいんけど。

智子 ……そう。

平八 馬鹿なことしたでエ、あれは。

智子 やっぱり、怒ってるの？

平八 (首を振って) あれは若い頃から学校の先生つちゆう仕事がいちばん好きだっただア。自分でも向いと思つとつただら。

智子 ……。(うなづく)

平八 だったら辞めるこたアないでエ。

智子 ……うん。

平八 どうせ他の仕事じゃ大して世の中の役にア立たんだで。

智子 ……。

平八 馬鹿なことしただよ、あれは。

店先から徳永の声が聞こえる。

徳永 (オフで) 智ちゃーん、郵便ーツ。

智子 はーい。(と立つ)

徳永 (オフで) 表に来てるでエ、何か速達だつてエ。

智子 あ、はアーい。

智子が店先に出て行く。小さくバイクのアイドリング音が聞こえている。

「どうもご苦労様でしたア」という智子の声がして、彼女は

速達の手紙を持って戻って来る。

その後から徳永も現れる。彼は非番で私服姿である。明らかに若作りの格好をして、例えばポロシャツの襟なんかもパリッと立てて、今風に（一九七八年風に）精一杯キメている。

智子 （戻りながら徳永に）ありがとう徳永さん。買い物？

徳永 ああ、ちょっと。

智子 ごめんなさい、ちょっと待っててね。（と居間に取り上がり、平八に）秀一くんは速達だって。（差出人を見て）東京のお父さんからだ。

徳永は三和土の所に立ち、平八に軽く挨拶する。

智子は秀一の部屋へ手紙を届けに行こうとする。

平八 （智子に）おまえ、風呂の水出しっぱないてるら。

智子 あッ、忘れるところだった。先そっちだア。

智子があわてて奥へ去る。

平八 （徳永に）ハア烏からすだでのう。三步あるきや前のこと忘れてるだで。

徳永 ハハハ。

平八 あれでどうやって嫁に行くだア。なア？

徳永 ねえ。（と笑う）

平八 あれ？ あんた。

徳永 は？

平八 お巡りさんだら。

徳永 あ。（と自分の服装を見て）今日は非番だもんでねエ、これからちよっと掛川か静岡にでもと思ってさ。

平八 遊びにけ？

徳永 うん、久しぶりに映画でも見すかと思ってねえ。

平八 ふーん、若い衆はいいなア。

徳永 そんな、若かないだよオラなんかハア。(と照れて笑ってから)……あの、ちよつと、小耳に挟んだだんさ。

平八 うん？

徳永 (声をひそめて) 先生、結婚するだけ？

平八 あア。

徳永 あの、野村っていう女の先生とかね？

平八 おう。

徳永 あアそりゃア、どうもおめでとうございます。

平八 (うなずいて) ありがとう。

徳永 これで何だねエ、やつと智ちゃんもお嫁に出せるじゃんねエ。

平八 (うなずいて) あれも早く売れてくれにや困るでエ。

徳永 (大きく) ねえエ、数えで三十二なら女も前厄だでねエ。

いやアしかしオラ驚いちゃっただよオ、あの女先生と猪原先生が一緒なるだなんて。

平八 なに、昔っからでエ。

徳永 そうけ？

平八 お互いそんな気はあっただよ。

徳永 はア。(と感心して) だん、歳がだいぶ違うら。

平八 (うなずいて) 違う。

徳永 大丈夫け？

平八 そんなもん一緒になっちまえば、後は関係あらずかい。

徳永 (顔が輝き) あアそうだよねえエ。(と何度も大きくうなずき) いやアこれは近來稀まれにみるグッドニュースだら。

智子が戻って来る。

智子 (平八に) お風呂もういいわよ。ちよつとぬるくなつち

やったけど、おじいちゃん長風呂だでちようどいいよね。

平八 ああ。(と立ち上がる)

智子 あんまり長く入るのも身体に毒なんだからね。

平八 智子。

智子 うん？

平八 今夜、冷や奴が食いたいで。

智子 またア？

平八 忘れんでくれ。

智子 わかった、あとでお豆腐買いに行く。

平八 うん。

平八は奥へ去る。

智子 こないだ一度おじいちゃんの冷や奴買い忘れたのまだ根に持つてるだに。(笑って) ハアやんなっちゃう。

徳永 ハハハ、智ちゃん見かけによらずそそっかしいでなア。

智子 何もう、徳永さんまで。(と叩く真似)

徳永 (笑って) あの子。

智子 え？

徳永 (アゴで奥を示して) あの子の声だら？ この英語。

智子 ああ、うん。

徳永 いや一昨日おとといさ、役場の図書室であの子が勉強してるの見たけたに言う人がいたもんだでさ、あアそれじゃアまだ猪原さんとこにいるだなアって思ってたけど、結局居ついでちやつただねエここの家に。

智子 (うなずいて) お父さんがね、あの子にしばらくこの家にいたらどうかって。受験勉強なんてどこにいたって出来るだでなんて言っつて。まアいろいろあつただけだね……。

徳永 ハア一週間くらいにゃなるけ？

智子 あアもうそんななるかしら。

徳永 (さりげなく) 大丈夫かね？

智子 何が？

徳永 いや、ま、先生がさ。

智子 お父さん？

徳永 うん。

智子 何で？

徳永 うん？ うん、いや、先生また悪い虫が出たじゃないか

ねエなんてさ、そんなこと言う人もいるでさ、この辺にヤア。

智子 ……。

徳永 (笑って) いや、まア世間の衆はとかく無責任に言うでさ、そういうこと。

短い間。

智子 そう思われても仕方ないところあるけど……でも、そんなんじゃないでね。

徳永 うん。

智子 あの子もちょっと他のことで悩んだこととかあったもんだでね。相談に乗ってやったりしてるだけ。

徳永 そうだら？ なア、だでオラもみんなにやそう言ってるでエ、ハハハ。

智子 うん……ありがとう、徳永さん。

徳永 いやア。

智子 (明るく) あ、御用は何でしたっけ？

徳永 あア、煙草をね。

智子 はい。

二人は店の方へ行く。会話はしばしオフで聞こえる。

智子 (オフで) 何だったかしら？ マイルドセブン？

徳永 (オフで) いや、こないだ出た新しい奴あるじゃんねえ。

智子 (オフで) キヤビン？ ジョーカー？

徳永 (オフで) あ、それ。ジョーカーっていうの二つもらつとくでエ。

智子 (オフで) ありがとうございます。二つで四百円。

徳永 (オフで) ごめんよ、大きいのしかないやア。

智子 (オフで) いいよオ、ちよつと待ってて。

智子は居間に戻って手提げ金庫を開けて一万円札を両替する。
徳永も先刻の場所に戻る。

智子 (札を数えながら) フッフ、今日の徳永さん、何だかお酒落。

徳永 (とぼけて) そうけ? オラ非番の時はいつもこんなもんだに。

智子 そおオ? 何か若アい。

徳永 フフ、そうかいね? (と立てた襟などさりげなく直しながら) いや今日はこれから映画でも見に行かすかと思ってる。

智子 あ、いいなア。何見るの?

徳永 『野性の証明』。オラ高倉健の大ファンだよね。

智子 へえ。ハイお釣り、九千と六百円。

徳永 ありがとう。

智子 あの女の子も可愛いよね。

徳永 誰?

智子 ほら、薬師丸やくしまるひろ子っていう。

徳永 え? あアあれ、ヤクシマルつて読むだかね?

智子 違うの?

徳永 オラアずっとクスリシマルつて言ってた。バカに言いつらい苗字だやアつかねがね思ってたでエ。

智子 (笑って) だって奈良に薬師寺っていうお寺あるじゃん。

徳永 あ、そーいやアあるねエ、そーいうの。

智子 フッフ。

徳永 (思い切って) ……ねえ智ちゃん。

智子 うん?

徳永 よかったら智ちゃんも一緒に行かんけ?

智子 え？

徳永 今日は智ちゃん誕生日だら。オラが飯でも何でもドーンとご馳走ちそうしたげるで。

智子 ありがとう。でも、今日はちよつと……。

徳永 あ、そうだね。いきなり誘ってもいかんねエ。

智子 家にお客さんが来るで。

徳永 あ、そうかね、お客さんがね、うんうんうん。(やや落胆を隠せない)

電話が鳴る。

智子は徳永にちよつとすみませんと会釈して受話器を取る。

智子 (電話に) はい、猪原商店でございます。……もしも

し？ ……あ、野村先生？ ……うん、お父さん、いまは留守。摘んだお茶、工場こうばに運んで、そのあと何か静岡の方まで本を買いに行くでって……うん、もう帰って来る頃だと思っただけど。野村先生いまだどこ？ ……え、そんなところで何してるの？ ……フフフ、何よオ、そんなとこにいないで家に来ればいいだに。(相手の様子がおかしいと気づき) ……どうしたの？ 何か変だよ、声が。……何かあったの？ ……(間) ……え？ それってどういうこと？ ……(間) ……わかった。私いますぐそこへ行くから。……うん、すぐ行く。ちよつとそのまま待つてよ。いい？ じゃ。(電話を切る)

徳永 どうしたでエ？

智子 うん、ちよつと……。

徳永 あの女先生だら？ 猪原先生と結婚することになっただつたねエ。オラちつとも知らんかったでエ。

智子 うん、そうなんだけど……ちよつとごめんなさい。

智子は廊下に出て秀一のいる奥の部屋へ声をかける。

智子 (奥に向かつて) 秀一くん、ごめんなさい、ちょっと来てエー。あ、勉強の道具も持ってエー。

秀一 (オフで) ……はアい。

徳永 どうしちゃったでエ、あの先生どうかしただけエ？

智子 ううん、そうじゃないけど、ちょっと会って話したいことがあるで。

徳永 ふーん。

智子 (笑いを作つて) 別に大したことじゃないけど。

徳永 そう。

秀一が辞書と教科書を持って出て来る。

秀一 何ですか。

智子 あ、悪いけどちょっとの間だけこの部屋で留守番しててくれる？ もちろん勉強しながらでもいいで。

秀一 店番、てことですか？

智子 うん、もうあんまりお客さんも来んと思うけど。

徳永 オラがやろうか？

智子 だって徳永さん、映画じゃない。

徳永 うん、まア。

智子 (秀一に) 大丈夫よね？

秀一 店番ていうのは。

智子 うん。

秀一 要するに、何をすれば。

短い間。

智子 要するに。

秀一 はい。

智子 お客さんが来て品物を買ってくれたら、その代金をもらうの。

秀一 なるほど。

智子 出来るでしょ？ それくらい。

秀一 たぶん。

智子 じゃやって。

秀一 はい。

智子 ごめんなさい徳永さん、また今度誘って。

徳永 あ、うん。

智子は勝手口から出て行こうとして立ち止まる。

智子 (秀一に) あ、お父さん何て？

秀一 え？

智子 速達来たじゃない、さつき。

秀一 あ、まだ……。

智子 読んでないの？

秀一 ……はい。

智子 駄目よ、あなた電話もしてあげないし、かかって来ても

お父さんだと意地になって出ないし。

秀一 ……。

智子 きつとすぐく心配してるで、だからわざわざ速達なんか出しただに。すぐに読んで、一度ちゃんと電話しておあげな

さい。

秀一 ……。

智子 わかった？

秀一 (仕方なく) はい。

智子が出て行く。

秀一は徳永に改めて黙礼する。

徳永 やア。

秀一 どうも。

徳永 (智子が出て行った方をアゴで示して) またバカに慌てて
出たじゃねえ。

秀一 ええ……。

廊下のガラス戸越しに智子が自転車を引つ張り出して行くの
が見える。

徳永 何だいねえ。

秀一 さあ……。

徳永 (話題を変えて) さっきから読んでたのはあれなら、英語
の教科書だら。

秀一 はい、リーダーの。

徳永 (笑いがうなずいて) 何しよ声に出して教科書を何度
も読めっていうのが昔っから猪原先生の流儀だでねえ。「読
書百遍、意自ずから通ず。デイシプリン、デイシプリン」っ
つって。

秀一 ……。(思わず徳永の顔を見る)

徳永 ハハハ、オラも昔先生に教わった口でエ。

秀一 そうですか。

徳永 英語だって同じ人間のしゃべる言葉なんだで、しゃべっ
て覚えにゃ身につかんなんっつってね。何しよイヤっちゅう
けに読まされただよ、みんな。デイシプリン、デイシプリン
っつってね。

秀一 あの、それ。

徳永 あ？

秀一 デイシプリン、デイシプリンっていうの、猪原先生の口
癖なんですね。

徳永 ああ、あんたも言われたら。

秀一 はい。

徳永 (笑って) 昔っからそうでエ。何しよ二言目には「デイ
シプリン、デイシプリン」だでの。そんであだな仇名もミスタ

ー・デイシプリンだったでエ。

秀一 へえー。(笑う)

徳永 いまだにどんな意味だかは知らんだけどさア。

秀一 鍛練とか、修練っていう意味です。

徳永 あ、そうけ？

秀一 あと、規律とか。猪原先生は肝を練ることだとか言ってたけど。

徳永 ふーん。そんなこと言ってたってあんた、軍隊じゃないだ
でねエ、学校つちゅうところは。

秀一 (吹き出して) ええ、まア。

徳永 まアしかし、あの先生が言うに「頑張れ、頑張れ」って
言ってるように聞こえたなア。オラアずっとそんな意味だと
思ってたでエ。「デイシプリン、デイシプリン」……「頑
張れ、頑張れ」ってなア……。

秀一 ……はい。

徳永 (少し声をひそめて) ところであんた知ってるけ？ 猪原
先生が再婚するつちゅう話。

秀一 はい。野村先生とでしょ。

徳永 なあア。オラもそれ聞いてビックリこいちゃったでエ。

秀一 (苦笑して) 僕も。男の人が女の人に本当にプロポーズ
するところ、初めて見ました。

徳永 あんた見た。

秀一 はい。

徳永 はアー。(と感心したように首を振って) オラア先生だけ
は再婚なんて絶対せんって思ってただんなア。

秀一 どうしてですか。

徳永 どうしてって先生はハアそっちの方の人だと思ってたで
ねエ。

秀一 そっちの方の人？

徳永 (慌てて) あ、違うでエ。オラん教わってた頃は病気の
奥さんがまだ生きてたつた頃ださア、あの頃の先生はそり

「ヤアハア愛妻家で有名だったでね。」

秀一　へえー。

徳永　だで奥さん亡くなつてからはさ、もう他の女の人と一緒に
なるなんて気はなくなつちやただねなんてさ、いや、みん
なそう思つてたでエ。まアそれでもオラにとつちやアめでた
い話だけエがさ。

秀一　（何故あなたにとつて、とは思うがとりあえず）……はい。

徳永　先生が後妻をもらやアあんた、これでやつと智ちゃんも
大手を振つて嫁に行けるでねエ。まアよかつたこんだよ。

秀一　……ああ、それで。

徳永　あ？

秀一　何か今夜、智子さんの婚約者の人がこの家に来るとかつ
て。

徳永　え？

秀一　何かそんな話らしいです。

問。

秀一　まア僕には別に関係ないことだけど……。

徳永　……。　（固まっている）

問。

秀一　……あの、何か？

徳永　うん？　いや、そりやア、二重におめでたいやア。ねえ。

秀一　ええ。

徳永　（ほんやりと独言のように）ハハハ、そうかそうか、婚約
者がねエ、そりやアよかつたじゃんねエ。（秀一に）……あ、
ほんじゃ、オラ帰るで。

秀一　はい。あの。

徳永　うん？

秀一 ……毎度どうも。
徳永 ……あ、うん。

徳永が虚ろな足取りで出て行く。

秀一は卓袱台の前に座って教科書を広げる。そこに挟んでおいた父からの手紙を取り出してしばしながめるが、封を切らずに卓袱台に置く。それから声を出して教科書を読み始めるが、一節を読み上げたところでそれもすぐに放り出し、コロリと横になってしまう。

間。

遠くで汽車の汽笛が聞こえる。

彼は再び起き上がると、手紙の封を切る。その中身をまさに読み始めようとした時に、正義の軽トラックが帰って来た音が聞こえてくる。

彼は再び手紙をしまい、教科書の音読を始める。

正義が入って来る。

正義 ただいま。

秀一 お帰んなさい。

正義 智子は？

秀一 ちょっと出てます。

正義 そうか。(秀一の正面に座り) どうだ、やってるか？

秀一 はい。

正義 うん、そうか。

秀一 ……でも。

正義 うん？

秀一 やっぱり何かちょっと……。

正義 何だ？

秀一 (言いにくそうに) ちょっとあせるっていうか……。

正義 なぜだ？

秀一 学校の教科書程度の英語だと、受験じゃ役に立たないっ

て聞いたことあるし……。

正義 (明るく) そんなことあらずかい。

秀一 そうかな……。

正義 高校の教科書をみっちりかんべきと完璧に勉強してきた者が、大学の受験に受からんだなんてのはおかしな話じゃないか。道理に合わないよ。

秀一 それはそうだけど……。

正義 試験のテクニクばかりを磨く勉強なんてつまらんと思わんかね。まア一つのゲームだと考えればそれも楽しいのかもわからんが、今の君にはとてもそんなふうを考える余裕はないら、うん? どうだ。

秀一 それは……まア。

正義 (笑って) だったら余計なことは考えない。大丈夫だ。教科書さえきちんとやれば必ず受かる。

短い間。

秀一 (苦笑して) 何か。

正義 うん?

秀一 イワシの頭も信心からみたいな話だなア。

正義 (笑って) この野郎、言うじゃないか。

秀一 フフフ。

正義 まア君ならそろそろそんなふうに言い出すだろうと思つてなア。

正義は紙袋からペーパーバックの洋書と岩波新書を取り出して秀一に渡す。

正義 明日からはそれも読んでごらん。

秀一 (表紙を読んで) 『ショート・ヒストリー・オブ・ザ・ワールド』……? ……?

正義 (うなずいて) H・G・ウエルズが書いた、まア歴史の入
門書だ。

秀一 へえ……。 (とバラバラめくってみる)

正義 そっちはその翻訳の『世界史概観』だ。シーザーでもナ
ポレオンでも何でもいい。面白そうだと思う、自分の好きな
チャプターから読んでごらん。

秀一 はい。

正義 初めは大ざっぱでいい。いちいちチマチマと辞書なんて
引くなよ。とにかく大きく声に出して読む。ぐんぐん力づく
で読み飛ばして、とにかくその章の最後まで一気に読み通し
てしまう。なアに、そうやってただ読むだけなら二十分くら
いのもんだ。そんなふうにしてまず何度も同じ章を読む。そ
れで、どうしても引きたくなくなった単語だけ辞書を引くように
する。その方がここ (頭) に入りやすい。

秀一 ……。 (真剣な顔でうなづく)

正義 そのうち全体の意味がぼんやりつかめてくるだろう。そ
こで初めて翻訳にあたってみる。すると自分が間違っていた
ところを幾つか発見できるはずだ。そうしたら今度はそのパ
ラグラフなりセンテンスなり、とにかくそれだけを自分が納
得できるまで集中的に訳してみればいいだア。

秀一 (真剣に) はい。

正義 しかしだ、翻訳を読みだすと、そっちだけ読む方が面白
くなってしまうこともある。こういう場合どうするか。

秀一 ……。 (真剣な顔でうなづく)

正義 (にやりと笑って) その時は我慢なんてせずにそのまま読
んでしまえばよろしい。それでも最低限「歴史の勉強」には
なる。

秀一 (笑って) はい。

正義 やり方は君の自由だ。だがいいか、受験のためだけの勉
強なんて思うなよ。これは自分のための、自分の勉強なんだ
と思えよ。

秀一 はい。

正義 (うなずいて) もし受験までの間にこの半分でも読めたら大したもんだ。それだけでハア英語は百パーセントの自信を持つていい。もし全部読めたとしたら……これはハアとんでもないことだ。どんな大学だろうが絶対に合格間違いないだ。

秀一 (笑って) 本当かなア。

正義 何だ、イワシの頭も信心からだぞ。

秀一 フフフ。

正義 デイシプリン、デイシプリン。

秀一 ハハハ。

正義 何だア、笑う奴があるか。(と自分も笑ってしまう)

二人が笑い合う幸福な情景がしばしある。

正義がウイスキー(角瓶)とグラスを持って来る。

正義 飲むか？

秀一 ……いえ。

正義 うん、君は受験生だ。やめておけ。(自分のグラスに注ぐ)

秀一 ……あ、やっぱり、一杯だけ。

正義 馬鹿野郎。(笑って) まアこれは気づけだぞ。(秀一のグラスに注ぐ)

秀一 はい。

正義 デイシプリンには反しない。

秀一 フフフ。

正義 それじゃ。(乾杯の仕草をする)

秀一 乾杯って、英語で何て言うんですか？

正義 乾杯はボトムス・アップだ。(瓶の底を使って説明する) ボトムをアップする。つまり大いにやりましょうという意味だな。

秀一　じゃア……ポトムス・アツプ。

正義　馬鹿野郎、大いにやろうって奴があるかア。フフ、まあいい。君は勉強を大いにやらにヤアいかんでな。ポトムス・アツプ。

二人は乾杯し、ひと口飲む。

秀一　カーツ……すげえ。

正義　喉のどが焼けて、ジワーっと腹の中へ落ちてゆくのがわかるら。

秀一　はい。

正義　ゆっくり、ゆっくり飲めよ。ウイスキーってのは特にそういう酒だ。

秀一　はい。

正義はハイライトを取り出して火をつける。

正義　君は煙草は吸うのか？

秀一　いえ。

正義　（うなずいて）それはいい。酒は少しくらい飲んでもいいけエが、煙草は出来るだけやめておけよ。これは百害あって一利なしだでなア。

秀一　じゃ、どうして吸うんですか？

正義　（笑って）うまいからだ。……悲しいことだが、うまい。

秀一　悲しい……？

正義　私らの世代じゃ軍隊で煙草を覚えたっていうのが多い。私もそうだ。煙草は各自に支給されたでね、吸わんともったいない気がしてなア。

秀一　へえ。

正義　いったん覚えたらハアあんなにうまいものはなかったでなア。

秀一 ふーん。

正義 殊に戦後のいちばん物が無い時期にはね。

秀一 はい。

正義 配給でせっかく「のぞみ」が手に入ったのに、それを巻くインディアン・ペーパーが手に入らんなんてことがよくあつてなア……あア、「のぞみ」つていうのは紙巻き用の煙草だ。それを巻く紙がないだなア。それで……恥ずかしいことだけエが、コンサイスの辞書をちぎって巻いてな、またあれがいちばんいいだなア、そうやってまで吸ったもんだつた。……だで、悲しいことだが、うまい。

秀一 ……なるほど。

間。

正義 私には好きな歌があつてね。

秀一 歌、ですか？

正義 そう。ソングじゃないよ、ポエムの方だ。

秀一 あ、はい。

正義は文机のメモ用紙を取って、そこに歌を書きつけ、秀一に渡す。

正義 これだ。

秀一 (読む)「屑たばこ集め喫へれど志す高き彼物忘れふべしや」……。

正義 (うなずいて)「屑たばこ集め喫へれど志す高き彼物忘れふべしや」……どうだ、いいだろう？ これはね、私の敬愛する吉野秀雄という歌人が詠んだ歌です。

秀一 ……どういう意味ですか？

正義 それは自分で考えてごらん。

秀一 うーん……(としばし考えて)ボロは着ても心は錦み

たいなことですか？

正義 (笑って) 馬鹿野郎。

秀一 (独言) 違うのか……。

正義 (笑って) 品位の問題だ。

秀一 うーん…… (と考え込んで) ……高き彼物ってのがわからないな。高き彼物って何のことですか？

正義 (嬉しそうに) さアそれだ。それが、私にもわからん。

秀一 なアんだ。

正義 高き彼物とはいったい何だろうなア。この作者は、短歌のことを「殊によると名づけやうのない一種の高邁こうまいな何物

か」であるといったが、そういうことなのかも知れないなア。

秀一 名づけようのない……？

正義 一種の高邁な何物かだ。

秀一 それじゃますますわかんないな。

正義 わからないか。

秀一 はい、わかりません。

正義 (うなずいて) わからなくてもいいだア。私だってわからない。だけど私はね、若い頃、よくこの歌を口ずさんだだよ。

そして高き彼物とはいったい何だろうかと考えた。

秀一 はい。

正義 それはわからん。わからんがしかし、それは確かにこの世に在るものなんだ。この世に確かに在る、何かひじょうに尊いものなんだ。自分もそれを目指そう。いつかそこに達しよう。それが勉強だ。それが人間として生きるということだ。そう思うとね、少しここ(胸)に灯がともったような心持ちになったもんだ。(ウイスキーを飲み干して) ……ねえ藤井君。

秀一 はい。

正義 君も勉強しろよ。うんと勉強しろよ。月並みな言い方だ。けエが、それがシノケンの遺言じゃないか。

秀一 ……。

正義 シノケンのその言葉だって、殊によると名づけようのな
い、一種の高邁な何物かなのかも知れないでね。そう思わな
いか。

問。

秀一 デイシプリン、デイシプリンですね。
正義 そうだよ。デイシプリン、デイシプリンだよ、君。

二人は何となく可笑しくなってまた笑う。

正義は自分のグラスに二杯目のウイスキーを注ぐ。

続いて秀一も自分で注ごうとする。

正義 おい、一杯という約束だぞ。

秀一 あと半分だけ。

正義 君はとんでもない酒飲みになるなア。

秀一 教えてくれたの先生じゃないですか。

正義 俺のせいにする気か。

秀一 ボトムス・アップ。

正義 馬鹿野郎。

二人は笑いながら、またウイスキーをちびちびと飲む。

秀一 さつき、あのお巡りさんが来て。

正義 うん？ あア徳永君か。

秀一 はい。あの人も昔先生に教わったって。

正義 そうだ。出来の悪い生徒でなア、あいつには苦労したで
エ。

秀一 フフフ。

正義 こっちもまア若かったからやれただなア。私もまだ三十
そこそこの頃だったで。今だったらあんな物分かりの悪い男

に教えるのはハアごめん蒙こうむるでなア。(笑う)

秀一 その頃の先生は愛妻家で有名だったって。

正義 (苦笑して) あの野郎、そんなことを。

秀一 だから先生が再婚されるなんてすごい驚きだったって言うてました。

正義 ……。(笑いが消える)

問。

正義は正座をする。(以下の正義は一度も笑わず終始真剣な表情で)

正義 ……さっきの歌ねエ。

秀一 はい。

正義 教えてくれたのは私の妻ですよ。

秀一 亡くなられた…奥さんですか？

正義 (うなずいて) 野村先生と同じく中学校の国語の教師をしてました。私とは静大の教育学部で知り合った。

秀一 ……。(うなずく)

正義 元もとは大磯の出でねエ、戦後しばらく鎌倉の学校に通ってたことがあって、そこで吉野秀雄の授業を受けたそうです。吉野秀雄という人も元もとは群馬の高崎の人だけエが、その頃は鎌倉で学校の先生をしてらした。

秀一 ……。(うなずく)

正義 (仏壇を指して) 妻はたいそう美人でねエ、私はコロリと参っちゃった。

秀一 写真、見ました。

正義 美人だろう？

秀一 はい。

正義 ところがね、中身の方はどうにも不器用で、不恰好で、ちっともスマートな人間じゃなかった。一所懸命だけが取り柄で、どうも危なっかしくて見ちゃおられんようなところが

あった。そこかまた魅力だった。

秀一 ……フフフ。(何だノロケかと思う)

正義 その妻が私と結婚する前にね、この世でもっとも尊敬する人間が恩師の吉野秀雄先生だと言った。

秀一 はい。

正義 妻が言うには、吉野秀雄という人はね、一言で言えば、他人の幸福とともに喜び、他人の不幸とともに悲しむような人だっていうだなア。それを聞いてね、私は、なるほどと思った。他人の幸福とともに喜び、他人の不幸とともに悲しむ。私もそういう人間になりたい、と思った。よし、きっとそういう教師になってやるぞと決心した。私はねエ、努力しました。猛然と努力をした。妻に惚れていたのでからね。……だが、駄目でした。私は、結局そういう人間にはなれなかった。

正義は二杯目のウイスキーをぐいっと飲み干してしまふ。

正義 私の人生は失敗作です。一個の無惨な失敗作だ。

秀一 ……。

正義 だから君にはうんと勉強しろと言うだア。うんと勉強して、私のような人間にはなるな。

問。

秀一 ……そうかな。

正義 うん？

秀一 失敗じゃないと思うけど……。

正義 ……。

秀一 先生は十分すぎるくらい、そういう人だと思っけど……。

正義 ……。

秀一 デイシプリン、デイシプリンってさ。(小さく笑う)

正義 (笑いなく) 君に私の何がわかる。(とやや乱暴に酒を飲む)

秀一 ……そりゃ、わからないけど……。

間。

秀一は正義を真似るかのように自分の酒を飲み干す。

正義 (それを見て) ……おい、そんなふうには飲むな。

秀一 ……。

間。

正義 (何とか笑いを作って) ……すまん。酒はもつと楽しく飲まにゃアいかんなア。よし、特例としてもう半分だけ許す。

正義が二つのグラスにウイスキーを注ごうとすると、店先で人の気配がある。

秀一 (気づいて) お客さんかな。

正義 うん? ……やア、お帰り。

智子が店先から入って来る。

秀一 お帰んなさい。

智子 お父さん、ちょっと話があるで。

正義 うん? 何だア?

智子 ごめん秀一くん、ちょっと向こうの部屋へ行つて。

(彼女はあきらかに怒っている)

秀一 ……。(正義を見る)

正義 (何事かを察して) うん、すまないが……。

秀一 ……はい。

秀一が奥へ去る。

智子はいきなり正義の酒を取り上げる。

正義 何するだア。

智子がかまわず廊下のガラス戸を開けて、グラスと瓶を庭に投げ捨てる。

ガチャンガチャンとグラスや瓶の割れる音。

正義 おいッ。

智子 お父さんにお酒なんか金輪際飲ませないでねッ。

正義 何だっちゆうだア。

智子 いま野村先生に会って来たでね。

正義 ……。

短い間。

智子 野村先生に結婚の話はなかったことにしろって言っただけって？

正義 ……。

智子 お父さんッ。

正義 ……しろとは言っていない。して下さいとお願ひしただ。

智子 何で？ 理由は？

正義 ……あの時は、酔っ払ってた。つい、調子に乗ってあんな馬鹿なことを言ってしまった。

智子 そんなの、あんまり酷い^{ひど}じゃないのッ。無責任じゃないのッ。

正義 (うなずいて) 無責任だ。

智子 軽薄すぎるじゃないのッ。

正義 (うなずいて) 無責任で、軽薄だった。

智子 開き直らないでよ。

正義 まったく軽蔑に値するような人間だア俺は。だで野村先生と結婚する資格なんて俺にはないだア。

智子 屁理屈へりくつ言わないで。野村先生がどれだけ傷ついたと思ってるよ。

正義 すまない、悪かった。(頭を下げる)

智子 私に謝ったってしょうがないでしょ？ まず野村先生に手をつけてでも謝んなさいよ。ううん、そもそもこんなことはねエ、謝ってすむような、そんな簡単なことじゃないだにッ。

正義 (うなずいて) わかってる。もちろん野村先生にもちゃんとお詫わびはする。謝ってすむことだとも思っていないで。ただ……おまえも余計な心配したじゃないかと思ってな。

智子 余計な心配？

正義 これでまた自分の婚期が遅れやせんかとか……。

智子 ……お父さん。(涙がこぼれそうになる)

正義 言つとくが、そんなことは関係ないでな、おまえはハアいつだつてこの家を出てついでいいだでな。

智子 ……情けないやア。

正義 すまん。

智子 お父さんは本当に情けない人だやア。……自分の娘が、そんなこと考えてると思ったの？

正義 ……。

智子 誰なの？ お父さんのせいでいちばんつらい悲しい思いをしているのは誰なの？ 野村先生でしょ？ そんなこともわからないの？ ……情けないッ。お父さん本当に情けないッ。

市恵が店先から現れる。

市恵 智子ちゃん、もういいで。

正義 (驚いて) 野村先生。

市恵 私が悪かったで。

正義 ずっとそこにいらしたんですか？

市恵 すみません。

正義 いいえ、こちらこそ申し訳ない。(手をついて) この通りです。

市恵 いいえ、私が悪かったの、本当にごめんなさい。

智子 どうして？ 野村先生はちっとも悪くない。悪いのは一方的にお父さんの方だに。

正義 その通りです。

市恵 (首を振って) 違うの。私が先生に言われた通り、私の方から断ったことにしとけばよかったの。ごめんね智子ちゃん、ごめんなさい先生、こんなふうにお騒がせしちゃって。フフ、馬鹿ですなエ私、自分でもやんなっちゃうやア。

智子 野村先生。

市恵 失礼します。

正義 (慌てて) 待って下さい、待って。どうかあの、これだけはやわらせて下さい。

市恵 いいえ、どうかも何も。(と行く)

正義 あの日あなたのことを好きだと言ったのは、あれは、真剣な気持ちですから。

市恵 ……。(止まる)

正義 いや、あの日が最初じゃない。実はずっと以前から、そういう気持ちを持っておりました。…あなたは私の死んだ妻に似ているで。

市恵 ……。(ふり向く)

正義 もちろん、顔やかたちがというわけじゃない。

市恵 ……。(うつむく)

正義 そうじゃなくてね、あなたという人間の、何というか、真っ直ぐな、温か味のようなものが似ているのです。時々、どきつとするくらいでした。もちろん、あなたはあなただ。

こんな言い草が失礼であることは百も承知です。ですがどうか、私がふざけ半分であんなことを言ったのではない、ということだけはわかって下さい。冗談半分で、あなたのことをからかった、などとは思わないでいただきたいのです。私は、本気でした。あの時は、真面目に、真剣にあなたに求婚したつもりです。

問。

市恵 (顔を上げて) ……私も、本気でした。

正義 ……はい。

市恵 あの時、私も真剣にお受けしました。

正義 ……はい。

市恵 それでなぜ、駄目なのでしょうか。

正義 ……。

智子 そうよお父さん、そんなら何でやめるなんて言い出したよ。

正義 ……。

市恵 やはり、私では、駄目なのでしょうか。

智子 野村先生そんなことない。(正義に) 答えてよ。

正義 (苦しそうに) 俺はハア五十五だで。野村先生とは釣り合

わんじゃないか。先生にはもっと若い人がいい。

智子 そんなこと。

市恵 そんなこと、私は少しも気にしておりません。

正義 私が、気にします。

智子 お父さんッ。

正義 私はこの先ハア長くない。私が死んだら、後に残される

野村先生と勇太君がかわいそうだ。

智子 何がこの先長くないよ。こないだ病院であと三十年は大丈夫だって言われて来たばっかじゃないの。

正義 ……。

智子 ちゃんと本当のこと言っつてよ。野村先生にはいまここで
お父さんからそれを聞く権利があるだでね。

正義 ……。(市恵を見る)
市恵 ……。(うなづく)

問。

正義 いま言っつたのが……本当のことだ。俺はハア長くないだ
ア。

智子 何言っつてるよ、だつてちゃんと病院で。

正義 (遮つて) 病院には行っつてないだ。

智子 え? ……今、何て言っつた?

正義 (ゆつくりと) 病院には、行かなかつた。検査なんか、本
当は受けてないでエ。

問。

智子 ……どういふこと?

正義 ……自分の身体のこと、自分がいちばんよくわかつて
るで。

智子 ……わかつてるつて?

正義 俺は、ガンだ。たぶん肝臓あたりの。ハア長くないでエ。

智子 なにバカなこと。

正義 おまえには隠してたけエが、この半年ずっと体調が悪い
でエ。それが少しずつだんだん悪くなつてきてるのも自分で
わかるでエ。

智子 ……。(絶句してしまふ)

正義 そういふわけだで。(と市恵に頭を下げ) ……すみません。
本当に申し訳ない。

問。

市恵 （静かに）明日は日曜日ですから。

正義 はい……………？

市恵 あさつての朝検査に行きましょう。

正義 ……。

市恵 首に縄つけてでも連れて行きますから。

正義 ……。 （静かに首を振る）

市恵 大丈夫ですから。私がついてますから。きっと治りますから。

正義 ……。

智子 （気を取り直し）そうよ、お父さんの素人判断なんかあてにやならんでねエ、ちゃんと病院で診てもらわなきゃ本当のところはわからんだで。（市恵に）私の知り合いにすごくいいお医者さんがいるで。

市恵 そうだね、智子ちゃんついこないだまで製薬会社にいたつただもんね、お医者様の知り合いはたくさんいるわね。お願いね。

智子 任せといて。いいわね、お父さん。

正義 ……。 （廊下の方を見る）

秀一が激情を必死で抑えているような顔で廊下に立っている。

秀一 先生、ちょっと聞きたいことがあります。

智子 秀一くん、悪いけど後にして。

秀一 どうしても今聞きたいんです。

正義 ……何だい？

秀一 先生はどうして学校を辞めたんですか？

智子と市恵も秀一を見る。

間。

秀一の周りには、殺気のような、せつぱつまった空気がある。

正義 (秀一から視線を外し) そんなことをなぜ……。

秀一 教えて下さい。

市恵 (厳しい表情で) なぜ知りたいの? そんなことはあなたにはまったく関係のないことよ。

間。

正義 (再び秀一をじっと見て) ……わかった。後で話そう。

秀一 (首を振って) 今すぐ知りたいんです。本当の理由を、今すぐ。

市恵 どうしてなの? どうしてそんな、今すぐでないといけないの?

秀一 親父を、怒鳴りつけて、やりたいから。

市恵 あなたの、お父さんを?

秀一 はい。(うなづく)

智子 どういうこと?

秀一 親父からの手紙に、猪原先生がどうして学校を辞めたのかということが書いてあります。たぶん教育委員会とかいろんなツテを使って調べたんだと思います。

一同 ……。(あっと思う)

秀一 先生が十五年前にある男子生徒と同性愛事件を起こしたって。それが学校を辞めさせられた理由だって。

一同 ……。

秀一 本当ですか?

正義 ……。

秀一 違うって言って下さい。(怒りと屈辱に震えて) ……親父のやつ、速達なんかで送ってきやがって。僕のことか心配だつて。おまえは何もされちゃいないかって。こんな汚らわしい手紙を、大げさに速達なんで送ってきやがって、ちくしようつ。

正義 ……。

秀一 違うって言って下さい。こんなのは全部デタラメだって。そしたら今すぐ親父に電話して、怒鳴りつけてやりますから。あんたは、世界中で一番くだらない人間だって。

問。

正義 (静かに) 君のお父さんはくだらない人間なんかじゃない。君のお父さんの心配はもつともなことだ。

智子 お父さん。

正義 すべて事実だ。

市恵 先生、そんなふうにつっちゃア……。

秀一 本当の……、ことなんですか？

正義 そうだ。

秀一 じゃア……僕のこと、そういう目で見てたってことですか？

市恵 (厳しく) 秀一くん、そんな馬鹿なこと言うもんじゃないにツ。

正義は虚ろな目で秀一をじっと見る。

正義 ……そうかも知れん。(目を伏せる)

市恵 先生。

秀一は踵きびすを返して戻ろうとする。

市恵 秀一くん、もつとちゃんと聞きなさい。

秀一 (怒ったようにふり向いて) はい。

市恵 そんなのまったく事実とは違うだね。単なる無責任な噂だ。先生はね、むしろその生徒と同様に被害者だったのよ。

(正義に) ねえ先生、そうじゃないですか。先生だって被害

者じゃありませんか。秀一くんきちんと本当のことを話してあげて下さい。

正義 ……。(目を伏せたまま)

市恵 (秀一に) 猪原先生はね、その生徒のために親身になって力になってあげてただけなの。家庭の事情が複雑な生徒だね、家ではなかなか勉強ができないっていうんで、だから先生が、ご自分の宿直の日にはずっと、一緒に学校に泊めてあげてたの。宿直室で勉強しなさいって。それだけのことなの。それだけのことだっただに、それを周りがいやらしい目で見、無責任におかしな噂にして大騒ぎしたもんだで、あんな大問題みたいになって、それで最後は先生が学校お辞めにならにゃいかんようなことにまでなっちゃったの。だから先生だって被害者なのよ。

秀一 ……。(正義を見る)

正義 (市恵に) 私は、その生徒一人だけを特別に鼻^{ひいき}負した。

これだけだって、教師としてはあるまじきことでした。

市恵 それは……そうかも知れませんが。

正義 先生がそうやって私をかばって下さることは、実にありがたく、かたじけないことですが……しかし、噂は事実です。少なくとも、私はあの時、たしかにその男子生徒に恋をしていた。

市恵 先生……。

正義 私には、恋愛感情があった。それは、事実です。

智子 ……。

正義 (秀一に) こっち、座らないか。そんなとこで突っ立つて聞くのも何だろう。

秀一は居間に入って来て、座る。

正義 (智子に) おまえにも、あの時のことはちゃんと話してなかつたな。

智子 ……。(うなづく)

正義 こんなこと、ハア一生誰にも話すことはあるまいと思っ
てた……。

智子 話して、お父さん。

正義 ……。

智子 私、すぐく聞きたい。

正義 (うなずいて) 智子。

智子 はい。

正義 その前に一杯だけ。

智子 何言ってるの。

正義 武士の情けだ。こんなこと……素面しらふじゃ話せんで。

智子 もうツ。

智子は台所から一升瓶と湯飲みを持って来て乱暴に置く。

正義は一杯注いで、飲み、間をおいて、やがて静かに語り出
す。

正義 (秀一に) ……その学校で教師をしていた頃、私は水泳
部の顧問をしていてね。

秀一 ……。(うなづく)

正義 その生徒も部員の一人だった。自由形のエースだ。快活
でさっぱりした奴でね、いい生徒だった。頭も良くてな、本
人は医学部を志望していた。家はパチンコ屋でそこそこ裕福
なんだが、野村先生の言う通り家庭が少々複雑でな、どうい
うつもりなのか、親父さんがお妾めかけさんを家に一緒に住まわせ
てた。妻妾さいしょう同居というやつだ。だから家の中で喧嘩が絶え
ない。彼の母親もそれですっかりノイローゼ気味だという。
そんな家において勉強に集中できるわけがない。だからふだん
は家中が寝静まるまで公園の街灯の下で勉強をしているとい
うだなア。……どうも不憫ふびんでねエ、何とかしてやれないもの
かと考えた。それで……思いついたのが学校の宿直室だ。宿

直室といっても四畳半だから布団を二つ並べて敷けばそれだけで一杯々々だがね、まア街灯の下で勉強するよりはマシだろう。私は他の先生にも頼んで、できるだけ宿直を代わってもらったりした。みんなにすりゃア渡りに舟だ。あんなものは本来誰もやりたがらんでね。……もちろん、その生徒と一緒に泊めるということは初めは誰にも内緒にした。特別やましい気持ちがあったわけじゃないが、それでも一人の生徒を特別に鼻屑することには違いないでね。まアあまり知られてもよくないと思った。……彼の方は喜んだよ。家も遠かったからね、行き帰りの時間だってバカにならない。その時間が全部勉強に使えるわけだからね。学校に泊まるのだから翌日遅刻の心配もいらん。……彼が喜ぶのを見ると、私も嬉しかった。……といってこれも特別な意味じゃない。ただ、よかつたな、頑張れよという気持ちだった。……そんなふうにしてひと月、ふた月、三ヶ月がたった頃だった。私たちのことが学校で噂になり始めた。彼の母親からも学校に苦情の電話がかかったりした。自分の息子に男の教師が色目を使っているらしい、学校は何をしている、やめさせてくれというだア。……それでも私たちは気にしていなかった。やましいことは何もなかったし、その頃には、校長先生にも事情を打ち明けて、非公式にだが許可ももらってあったからね。……それが、あと二日で夏休みという夜だった。……その夜はむし暑くてね、私たちは二人ともバンツ一ちようになつて過ごしていた。私は壁にもたれて一杯やりながら本を読んでいた。彼はいつものように布団の上に腹這いはらばになつて数学の問題を解いていた。……そのうち寝息が聞こえてきてね、ふと見たら彼はその格好のまま眠っちゃってた。……私の目の前に横たわっている彼の身体は、何ともいえず、のびのびしていてね、実に美しかった。若いということは、それだけでこんなにも眩しいものなのかと、しみじみそう思った。……その瞬間だよ。私は自分の胸がこう、急に締めつけられるような気がしたでエ。

気がついたら私はね……あろうことか、劣情をもよおしてました。……我ながら信じられなかったがね、私は自分の生徒の眠っている姿を見て興奮してしまったんです。……少し酒に酔っていたせいかも知れない。妻を亡くしてから、そういうことがなかったせいかも知れない。そういうことが何がいかに重なり合って、私の体にそういう突発的な変化をもたらしたのかも知れない。しかしね……その時、私はこれは恋なんだと思つた。この胸の、甘く、苦しい疼うずきは、まさしく恋愛じゃないか。俺はいま恋をしているぞつて。次に私が何を考えたかというのと、(苦笑して)あとで考えればこれは滑稽こっけいだけエが……彼が男子生徒でよかつた、と心の底から思つたんです。(智子に)死んだお母さんやおまえには申し訳ないがね、もしあれが女子生徒だったら、あのあとどうなつていたかわからない。いや、私は必ずその生徒を抱いてしまったと思う。きつと、何もかもかなぐり捨てて。恋というものは激しいからね。……もつとも、女子生徒だったら初めから宿直室と一緒に泊まるなんてことができるはずはないでね、滑稽というのはまアそういうことだが……。

間。

秀一 ……それで。

正義 うん？

秀一 先生は……どうしたんですか？

正義 ……うん。まさか彼を起こして交合まぐわいをするわけにもいかないからね。彼を見ながら手淫しゅいんをしました。

秀一 しゅいんって……？

正義 マスターベーションです。……(間)……(市恵に)私

はそういう男です。救いようのない猥漢わいかんです。いや、それどころかまるで変態です。このことだけでも、私にはあなたと結婚する資格なんてない。……もちろん、いくら私でもそん

なことをしちゃアまずいことくらいわかってた。私の中のお
ずかな分別は、このままそつと部屋を抜けて、散歩でもして、
この不自然な興奮を早くさまして来いと私に命じてました。
けれどね……私はどうしてもそうしたくなかっただア。

……私の中で長い間忘れられていた……こういう感覚……こ
ういう何とも甘美な感覚を、このまま消してしまいたくなか
った。分別なんかクソクラエと思った。……私は彼の眠つて
いる姿を見つめながら手淫をしました。はつきりと、これは
恋なんだと思いつながら。……短い……本当に短い恋だったけ
エが……。

間。

秀一 短い……？

正義 (うなずいて) 途中で……彼が突然、目を覚ました。そし
て私を見ました。私か何をしてたかを、はつきりと。

秀一 ……。

正義 私は、その時の彼の顔が忘れられない。……声も出ない
くらいに驚いた彼の顔が。……(間)……その瞬間に、私の
恋は終わりました。……私の教師としての人生もすべて。……
こんな人間が教師をやっているわけがない。……二学期
になってすぐに、私は、学校を辞めた。教師という仕事も……
一生捨てました……。

長い間。

智子 お父さんは、まだ彼のことが、好き？

正義 ……。

智子 つまり、そういう恋愛の対象として……。

正義 馬鹿。そんなものは、その時の、一瞬のことだけだ。

間。

智子 ……じゃ、どうしてかな。

正義 ……うん？

智子 どうして、それでお父さんは学校を辞めなくちゃならなかったのかな。

正義 ……。

智子 だってお父さんは元々、その生徒のために親身になってあげてただけでしょう。

正義 それはそうだ。だけど結果は、彼の心に深い傷を負わせてしまった。

智子 どうして？ どうしてお父さんはその生徒が傷ついてるって思うの？

正義 (苦しそうに) そのあと、彼は一度も俺に会いに来てくれなかった。……二学期になって、初めて県外の高校に転校したことがわかった。

智子 ……。

正義 俺はなア、自分がしたことを自分自身では悔いちゃいない。だけどなア、彼の心の中で、今でもその出来事が、青春時代の一点の黒い染みのようにして残ってることを思うと、時々、たまらない気持ちになるだア。彼に申し訳ない気持ちで胸がいっぱいになるだア。

間。

自動車が停車する音が小さく聞こえる。

智子 (穏やかに) そんなことない。彼はその夜の出来事なん

か、きつと何とも思っちゃいなと思う。びっくりしたのは事実だろうけど。

正義 おまえに何がわかるだ。

智子 わかるよ。その生徒の気持ちになれば。……彼が気にし

てるのは、もっと別のことだに、お父さん。

正義 別のこと？

智子 ……。(うなづく)

正義 別のことって何だア。

智子 お父さんが、自分のせいで、学校を辞めちゃったってこと。

正義 (ため息) 何を言ってる。

智子 そりゃア……そんなことがあつた後なら、恥ずかしくて、普通でもしばらくは口がきけんら。お父さんに挨拶できずに転校しちゃったのはそのせいだに。

正義 ……。

智子 だいたいその生徒が転校したのはご両親が離婚なさつたからだら？ お母さんの実家に彼がついて行くことになつたからじゃないの。お父さんのこととは関係ないと思う。

正義 何でおまえがそこまで知ってるだア。

智子 だって、私は彼と婚約してるもの。

短い間。

自動車のドアがパツツと閉まる音、小さく。

正義 ……何？

市恵 ……智子ちゃん。

秀一 ……。(驚いた顔で智子を見る)

正義 おまえが……片山君と……婚約？

智子 え。

市恵 本当なの……？

智子がうなづくのと同時に、店先から片山仁志(三十三)の
声がる。

片山 (オフで) ごめん下さい。

智子 はい。(と立って行き)……………どうぞ、こっちへ通って。

一同がぎよっとして顔を見合わせていると、智子に案内されて大きな紙袋を提げた片山が入って来る。

正義はその間に慌てて酒をもう一杯飲む。

片山は明るく快活な好青年だが、彼なりに腹を括くって乗り込んで来たぞという感じの緊張は隠せない。

片山 お邪魔します。

市恵 ……片山君。

正義 ……。(声も出せない)

片山 猪原先生……………ご無沙汰ぶさたをいたしました。片山です。

正義 ……う……………うん。

片山 野村先生も、お久しぶりです。

市恵 ……え、ええ、しばらく。元気そうね。

片山 はい。先生も、このたびは猪原先生とご結婚だそうで、本当におめでとうございます。

市恵 え……………うん……………。(目を伏せてしまう)

片山 それから、君が藤井秀一君だね？

秀一 え、あ、はい。

片山 猪原先生の昔の教え子で、片山仁志といいます。

秀一 あ、どうも、藤井秀一です。

片山 (畏かしこまって) 先生。

正義 ……うん。

片山 高校時代、あれほどのご厚情を賜りながら、今日までの御礼も申し上げず、ご挨拶にも伺わず、まことに失礼いたしました。これまでの非礼をどうぞお許し下さい。

正義 ……うん。

片山 あの頃は、本当にいろいろと、ありがとうございました。
(深々と頭を下げる)

正義 ……。

問。

片山 (苦しそうに) 実は……あちらに転校した後すぐに、先生が学校をお辞めになられたということの水泳部の元橋からの手紙で知りました。その理由が……僕自身に関係のあることだと聞かされて、どうしていいのかわからずに……長い間、そのことで苦しみました。本来なら、たとえ手紙一本葉書一枚でも、真っ先に先生にお詫び申し上げなくてはならないところを……今日の今日まで自分の弱さにかまけました。お許し下さい。

正義 ……いや。

片山 智子さんが猪原先生の娘さんであると知った時には、本当にビックリしました。大げさでなく、天が自分を罰しているのだと思いました。彼女にもつらい思いをさせてしまいました。

智子 このふた月は一日でも早くお父さんに会って話したいって、片山さんの方はずっとそう言ってくれてたんだけど、私の方が……なかなか気持ちの整理がつかなくて……。

正義 うん……そうか……。

片山 もし智子さんと出会わなかったら、僕はこのまま一生、先生にはお目にかかれなかったかも知れません。一年前に出会って、彼女に魅かれたのも、何だかこれは僕の運命だったような気がします。(智子に) ね？

智子 (小さく) バカ。

正義 ……。

市恵 そうだわ片山君、あなた、どこで智子ちゃんと知り合ったの？

片山 最初は仕事場です。僕の勤務してる病院に智子さんが新薬の営業に来られて。

市恵 病院？

片山 浜松の医療センターです。佐鳴湖さなるこのそばの。その内科に勤務しています。

市恵と秀一が正義を見る。

正義 君……医者になったのか。

片山 はい。いちおう現役で長崎大の医学部に通りまして。

短い間。

正義 (微笑んで) そうか。がんばったなア。

片山 (笑って) 先生のディシプリン、ディシプリンのおかげです。

正義 ……うん。

一同の間の空気がようやく少しやわらかくなる。

片山が紙袋からメロンの入った箱を取り出す。

片山 先生、これは十五年間ご無沙汰したお詫びのしるしです。

正義 メロンだな。

片山 (うなずいて) メロンです。普通はつまらない物ですがと言わにゃアいかんとこですが、これ、病院の前の果物屋でいちばん高かった奴ですから。

正義 うん。

片山 だから僕としちゃア決してつまらなくはないです。

正義 (苦笑して) 何言ってるだア。

片山 どうぞ。

正義 うん。ありがとう。

片山 それからこれは。(ともう一箱同じものを取り出す)
正義 まだあるのか。

片山 先生と野村先生のご結婚のお祝いです。
正義 ……。

間。

市恵 ありがとうございます。喜んでいただくわ。

正義 ……。(市恵を見る)

市恵 ねえ先生。

正義 ……うん。

市恵 ありがとうございます、片山君。

智子 ありがとうございます、片山さん。

正義 ……ありがとうございます。

片山 はい。(とニッコリ笑って)それからこれは。

市恵 まだあるの？

正義 そんなにメロンばかり。

片山 これで最後だけエが、重いな、どうも。

片山が大きなスイカを苦勞して取り出す。

智子 大きなスイカね。

正義 それは、何だ。

片山 これはまア、つけ届けといいますが、賄賂わいろというか……。

市恵 つけ届け？

正義 賄賂……？

片山はスイカを正義の前に差し出しておいて、再び姿勢をた
だす。

片山 先生、私と智子さんとの結婚を、どうかお許し下さい。

お願いします。(と頭を下げる)

短い間。

正義 君はスイカと引き換えに、智子をもらいたいというのか。

片山 さすがにメロン二つで予算が底をつきまして、でもこれもまアウォーターメロンというくらいですから。

正義 馬鹿野郎。

片山 フッフ。

短い間。

正義 片山君。

片山 はい。

正義 (しみじみと) 君は、立派になったなア。

片山 ありがとうございます。(少し泣けてしまう)

正義 智子のこと、よろしく頼みます。

片山 はい。

短い間。

秀一 (片山に) おめでとうございます。

片山 ありがとうございます。

市恵 (智子に) おめでとう智子ちゃん。

智子 ありがとうございます。(泣けてしまう)

正義はスイカの重みを確かめるように膝の上に乗せる。

正義 ……スイカ、食おうじゃないか。

智子 ……え、今から？

正義 うん、このスイカうまそうだ。(とボンボン叩き) みんなで食おう。なア?

片山 (明るく) はい。

智子 じゃア切ってくる。(とスイカを受け取ろうとする)

正義 (スイカを抱え込むようにして) いや、ここで俺が切ろう。包丁とまな板。

智子 はい。

智子が立つよりも先に、秀一が立ち上がる。

秀一 あの……僕はこれで。

片山 何だい、勉強かい?

秀一 はい。(一同に) あの、僕……明日、帰ります。

智子 ……秀一くん。

秀一 帰って……親父と、もう一度、いろいろちゃんと話してみようかと思えます。それから、シノケンのお袋さんとも……。

市恵 ……そう。

秀一 先生。

正義 ……。

秀一 失礼なこと言っちゃって……すみませんでした。

正義 ……。

秀一 いろいろ、本当にありがとうございました。(頭を下げる)

問。

正義 スイカくらい、一緒に食わんか。

秀一 ……。

智子 そうよ、みんなで食べましょ。

正義 うまいよ、きつと。

秀一 ……はい。

智子 さあさあ。(と秀一を無理矢理座らせる)

智子が台所へ去ると同時に、正義そのままの格好で前へ倒れる。

スイカが転がって一同は正義の異変に気づく。

秀一 先生ッ。

片山 先生、どうしたんですか？

市恵 (奥に向かって) 智子ちゃんッ！

正義 (うつぶせて腹を押さえて) いてててて……。

片山 どこですか？ どこが痛みますか？

智子 (血相を変えて戻って) お父さんッ！。

正義 (片山の上腹部を示して) この辺が……。

片山 (左肩や背中など触って) この辺はどうですか？

智子 お父さん、しっかりしてッ。

正義 うん、その辺りも……。

片山 ここは？ (と左側腹部を触る)

正義 いててて……そこも痛い。(と苦しむ)

市恵 智子ちゃん救急車。

智子 は、はい。

片山 いちばん近い病院はここからどれくらい？

智子 車で十五分ぐらい。

片山 なら僕の車に乗せて直接運ぶ方が早いぞ。とりあえずその病院に電話かけて。

智子 はいッ。

智子は電話早見帳をめくって病院に電話をかける。

片山 (正義の額に手をあてて熱をみながら) 先生、お酒飲みましたか？

正義 ……うむ。

市恵 さつきから日本酒を何杯か。

秀一 その前にウイスキーも少し。(市恵に) 先生、病気だったんですか？

市恵 (片山に) ご自分ではさつき肝臓ガンじゃないかって。秀一 ええ？

片山 それでどうして酒を飲んだんですか。(意地悪く) 先生、肝臓はそんなとこじゃないでね、もつと右の方だでね。

正義 ……。

片山 (市恵に) 急性膵炎すいえんです、たぶん。

秀一 先生ガンじゃないんですか？ 助かるんですか？

片山 (笑って) 当たり前だ。

市恵 (怒ったように) そうよ、そんなの当たり前じゃないの。

智子 (電話に) もしもし？ 佐藤病院ですか？ (片山に) 電話、出た。

片山 (電話を代わって) もしもし、内科の先生はまだそちらに？

市恵 (むしろ冷静に) 智子ちゃん、先生ガンじゃないって。

智子 本当？

市恵 ……。(うなづく)

片山 (電話に) 急患です。おそらく急性膵炎だと思います。

これから搬送しますんで準備よろしくお願いします。……はい、十五分ぐらいで、お願いします。(電話を切って) さア行きましよう。さア先生、僕につかまって。……大丈夫ですか？ 立てますか？

正義 ……うむむ。

片山 先生、ひと月やそこらの入院は覚悟して下さいよ。

正義 ……うむ。

片山 それと、おつらいでしょうが、今後は酒も煙草もやめてもらいますから。

正義 (痛みに耐えて歩きながら) やめるくらいなら……死んだ

方がマシンだ……。

智子 何言ってるんの、主治医の言うことは絶対だに。

正義 そんなにまでして……長生きして何になるだア……。

智子 お父さんッ。

秀一 先生、僕にはこの世で先生に教えてもらいたいことが、
まだまだいっぱいあります。

正義 ……。

片山 (笑って) そうですよ、ミスター・デイスプリンがそんな弱音を吐いててどうすんですか。

秀一 デイスプリン、デイスプリン。

片山 (明るく) デイスプリン、デイスプリン。

正義 ……。

片山 藤井君、先に行って戸を開けてくれ。

秀一 はい。

秀一は三和土から店先の方へ出て行く。

片山 (三和土に下りて) 先生、ここから車までは僕が背負います。

智子 大丈夫？

片山 平気。あ、保険証忘れないように。

智子 あ、はい。

智子は奥へいったん去る。

片山 (正義に背を向けて) さアどうぞ。

正義 ……片山君。

片山 はい？

正義 君は……立派になったなア……。

片山 ……フフ、それ、さっき聞きましたよ。

正義は片山に背負われて出て行く。

市恵は仏壇の前に行き、手を合わせる。

それから顔を覆って、静かに泣く。

智子が保険証を持って出て来る。

智子 (市恵を見て) ……野村先生、大丈夫？ (と静かに言う)

市恵 (顔を上げてうなずき) ……智子ちゃんも大丈夫？

智子 私は、大丈夫。

市恵 (微笑んで) 行きましょう。

智子 (微笑んで) はい。

二人が出て行く。

やがて、車の出発する音が小さく聞こえる。

その音に重なって奥から平八の音がする。

平八 (オフで) ……智子ーッ。 ……智子ーッ。

間。

風呂上がりの平八がビールとコップを持って出て来る。

平八 (店先を覗いて) 智子オ。 ……何でエ。どこ行っただア。

……豆腐買い行ってるだか？

平八はビールを卓袱台に置いて、再びラジオのスイッチを入れて聴こうとするが、あいかわらざうまくゆかない。

平八 ……どうやるでエ、こりゃア。

店先から徳永の音がする。

徳永 (オフで) 智ちゃん、いるかねえエー。

平八 ああ？

徳永 (現れて) あアおじいちゃん、智ちゃんいるかいねエ。

平八 今はだアレもいんでエ。

徳永 あ、そうかね。あの……お客さんは？

平八 あア？ あア、何か声がしてたみたいだけエが、知らんでエ。風呂から出て来たらだアレもおりやせんでエ。

徳永 ほオ、立派なスイカだねエ。

平八 あんた映画は。

徳永 あア、うん、今日はやめたで。

平八 そうけ。

徳永 いや、そんでね、さっきおじいちゃんが風呂入った後に、智ちゃんずいぶん慌てて出てったでさ、あアこりやきつとまた豆腐買い忘れるらなアと思ってオラン買って来といてやったでエ。(と豆腐の入った袋を見せる)

平八 (顔がほころんで) あア、そりやアありがたいヤア。

徳永 何でエ、ラジオけ？

平八 おう、野球聴かすかと思ってるだんさ。

徳永 どれ、オランやったらア。

平八 あア悪いなア。

徳永が居間へ上がってラジオのチューニングをする。

徳永 あア……野球はまだだねエ、まだ小沢昭一やってるで。

平八 あアそんならいいで。

徳永 何か音楽にしとかね。(とさらにダイヤルを回して)……あア、これでいいじゃん。

ラジオから流れ出す音楽。

徳永 ……ねエおじいちゃん、悪いだけどさ。

平八 あア？

徳永 (とプレゼントの包みを出して) これ、智ちゃんに渡しと
いてくれるかいねエ。

平八 何でエこりヤア

徳永 うん、何かネツカチーフみたいな奴でエ。今日、智ちゃん
の誕生日だでと思つて持つて来てただけど、さつき渡しそ
びれちゃったで。

平八 ほオーそりヤアそりヤア。

徳永 フフ、まア今さら気をひいたつてしよんないだけどさア
……。

間。

ラジオの音楽が流れている。

平八は卓袱台の上に残されたメモ用紙を手取る。

平八 (目を細めてその文字を読もうとしながら) あんたも飲んで
くけ?

徳永 え? いや、でもオラ……。

平八 (メモを見たまま) いいら。どうせだアれもおりやせん
だで。

徳永 (考えて) ……そうだね、そんじヤアお相伴にあずかる
うかねエ。(と立つ) じゃアこの豆腐、切ってくるでね。(台
所へ去ろうとする)

平八 こりヤアいったい何か書いてあるだア?

徳永 え? どれ。(読んで) 屑たばこ……集め喫へれど……
志す……高き彼物、忘らふべしや……? ……何だいねエ?

何かの標語だかいねエ?

平八 標語じゃアないら。

徳永 高き、彼物……つて、何だいねエ。

平八 さアなア。

間。

徳永 (メモを返し) ほんじゃ、ちょっと切ってくるで。
平八 お、すまんの。

徳永が台所へ去る。

平八 コップは台所だいどころの流しの横にあるでエー。
徳永 (オフで) わかったアー。

平八は再びメモをじっと読む。
ラジオから音楽が流れ続ける。
その曲に、遠い汽笛の音が重なって……。

——幕。

※山口瞳著『小説・吉野秀雄先生』を参考にいたしました。
吉野秀雄の歌も同著から引用したものです。